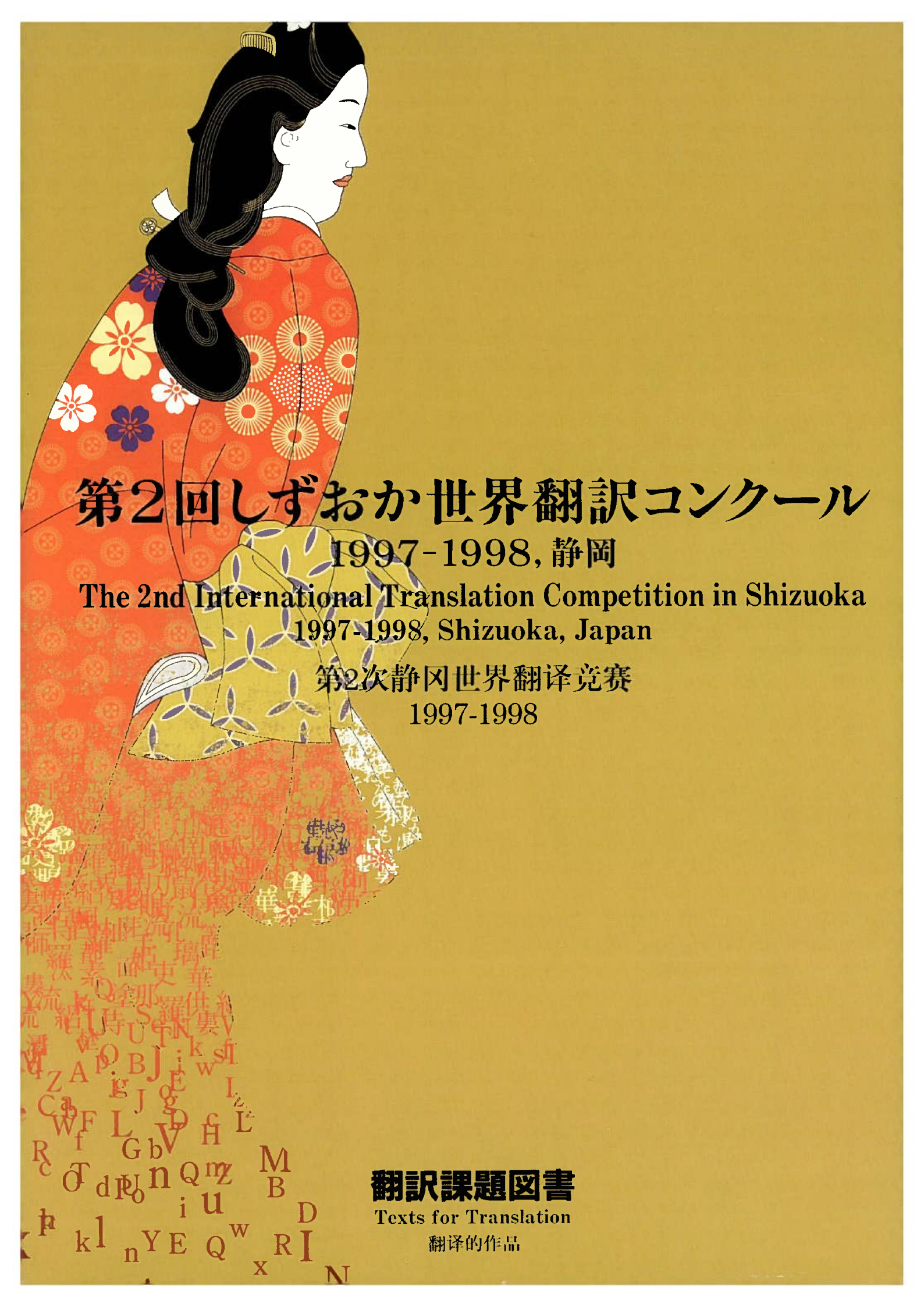




第2回しずおか世界翻訳コンクール

1997-1998, 静岡

The 2nd International Translation Competition in Shizuoka

1997-1998, Shizuoka, Japan

第2次静岡世界翻译竞赛

1997-1998

翻訳課題図書

Texts for Translation

翻译的作品

応募規定

a. 翻訳課題図書

左記の小説（短篇）3篇と評論3篇から、それぞれ1篇ずつを選択する。ただし、「盈虚」と「牛人」及び「礼儀について」と「友達のできない人」と「イヤなやつ」は、併せて1篇とする。

b. 翻訳言語

英語及び中国語のうち、一言語を選択する。

c. 応募期間

1998年12月31日(木)までに下記応募先に到着したものを有効といたします。

応募先 伊豆文学フェスティバル実行委員会事務局
〒420 静岡県静岡市追手町9-6
静岡県教育委員会文化課文化企画室

小説

古俗『盈虚』／『牛人』

中島 敦

3

『中島敦全集第一卷』筑摩書房

戦場の博物誌『ハゲワシ』

開高 健

17

『歩く影たち』新潮社

『観画談』

幸田露伴

29

『全集 幸田露伴』筑摩書房

評論

『達意といふこと』

丸谷才一

46

『文章読本』中央公論社

『二匹と九十九匹と』

福田恆存

60

『福田恆存全集』文芸春秋

『礼儀について』／『友達のできない人』／『イヤなやつ』

河盛好蔵

75

『私の随想選 第6巻私の人生案内』新潮社

文字づかいについて

作者の承諾が得られたものは、各作品の表記を統一するため、なるべく原文を尊重しつつ、本文の表記を次のように改める。ただし、送り仮名は原文どおりとする。

- (一) 旧かなづかいで書かれているものは現代かなづかに改める。
- (二) 旧漢字で書かれているものは新字体に改める。
- (三) 漢字には振り仮名をつける。

盈虚

衛の靈公の三十九年と云う年の秋に、太子蒯聵が父の命を受けて齊に使したことがある。途に宋の国を過ぎた時、畑に耕す農夫共が妙な唄を歌うのを聞いた。

既定爾婁豬

盍婦吾艾豨

牝豚はたしかに遣った故

早く牝豚を返すべし

衛の太子は之を聞くと顔色を変えた。思い当ることがあったのである。父・靈公の夫人（といつても太子の母ではない）南子は宋の国から来ている。容色よりも寧ろ其の才氣で以てすっかり靈公をまるめ込んでいたのだが、此の夫人が最近靈公に勧め、宋から公子朝という者を呼んで衛の大夫に任じさせた。宋朝は有名な美男である。衛に嫁ぐ以前の南子と醜関係があったことは、靈公以外の誰一人として知らぬ者は無い。二人の関係は今衛の公宮で再び殆どおっぴらに続けられている。宋の野人の歌った牝豚牡豚とは、疑いもなく、南子と宋朝とを指しているのである。

太子は齊から帰ると、側臣の戲陽速を呼んで事を謀った。翌日、太子が南子夫人に挨拶に出た時、戲陽速は既に匕首を呑んで室の一隅の幕の陰に隠れていた。さりげなく話をしながら太子は幕の陰に目くばせをする。急に臆したもののか、刺客は出て来ない。三度合図をしても、ただ黒い幕がごそごそ揺れるばかりである。太子の妙なそぶりに夫人は気が付いた。太子の視線を辿り、室の一隅に怪しい者の潜んでいるのを知ると、夫人は悲鳴を挙げて奥へ跳び込んだ。其の声に驚いて靈公が出て来る。夫人の手を執って落着けようとするが、夫人は唯狂気のように「太子が妾を殺します。太子が妾を殺します」と繰返すばかりである。靈公は兵を召して太子を討たせようとする。其の時分には太子も刺客も疾うに都を遠く逃げ出していた。

宋に奔り、続いて晋に逃れた太子蒯聐は、人毎に語って言った。淫婦刺殺という折角の義拳も臆病な莫迦者の裏切によつて失敗したと。之も矢張衛から出奔した戲陽速が此の言葉を伝え聞いて、斯う酬いた。とんでもない。こちらの方こそ、すんでの事に太子に裏切られる所だったのだ。太子は私を脅して、自分の義母を殺させようとした。承知しなければ屹度私が殺されたに違いないし、もし夫人を巧く殺せたら、今度は必ず其の罪をなすりつけられるに決っている。私が太子の言を承諾して、しかも実行しなかったのは、深謀遠慮の結果なのだ。

昔では当時范氏中行氏の乱で手を焼いていた。齊・衛の諸国が反乱者の尻押をするので、容易に埒があかないのである。晋に入つた衛の太子は、此の国の大黒柱たる趙簡子の許に身を寄せた。趙氏が頗る厚遇したのは、此の太子を擁立することによつて、反晋派たる現在の衛侯に桶突こうとしたに外ならぬ。

厚遇とはいつても、故国にいた頃の身分とは違う。平野の打続く衛の風景とは凡そ事変つた。山勝ちの絳の都に、佐しい三年の月日を送つた後、太子は遙かに父衛侯の計を聞いた。噂によれば、太子のいない衛国では、已むを得ず蒯聐の子・輒を立てて、位に即かせたという。国を出奔する時後に残して来た男の児である。当然自分の異母弟の一人が選ばれるものと考えていた蒯聐は、一寸妙な気がした。あの子供が衛侯だと？三年前のあどけなさを考えると、急に可笑しくなつて来た。直ぐにも故国に帰つて自分が衛侯となるのに、何の造作も無いように思われる。

亡命太子は趙簡子の軍に擁せられて意気揚々と黄河を渡つた。愈々衛の地である。戚の地迄来ると、しかし、其処からは最早一步も東へ進めないことが判つた。太子の入国を拒む新衛侯の軍勢の激撃に遇つたからである。戚の城に入るのでさえ、喪服をまとい父の死を哭しつゝ、土地の民衆の機嫌をとりながらはいらなければならぬ始末であつた。事の意外に腹を立てたが仕方が無い。故国に片足突つ込んだ儘、彼は其処に留まつて機を待たねばならなかつた。それも、最初の予期に反し、凡そ十三年の長きに亘つて。

最早（曾ては愛らしかつた）己の息子の輒は存在しない。己の当然嗣ぐべき位を奪つた。そして執拗に己の入国を拒否する。食欲な憎むべき。若い衛侯が在るだけである。曾ては自分の目をかけてやつた諸大夫連が、誰一人機嫌伺いにさえ

来ようとしな。みんな、あの若い傲慢な衛侯と、それを助ける・しかつめらしい老獺な上卿・孔叔圉（自分の姉の夫に当る爺さんだが）の下で、蒯聵などという名前は昔からてんで聞いたこともなかったような顔をして榮しげに働いている。明け暮れ黄河の水ばかり見て過した十年余りの中に、氣まぐれで我が儘だった白面の貴公子が、何時か、刻薄で、ひねくれた中年の苦勞人に成上つていた。

荒涼たる生活の中で、唯一つの慰めは、息子の公子疾であつた。現在の衛公輒とは異腹の弟だが、蒯聵が戚の地に入ると直ぐに、母親と共に父の許に赴き、其処で一緒に暮らすようになったのである。志を得たならば必ず此の子を太子にと、蒯聵は固く決めていた。息子の外にもう一つ、彼は一種の棄鉢な情熱の吐け口を闘鶏戲に見出していた。射倖心や嗜虐性の満足を求める以外に、逞しい雄鶏の姿への美的な耽溺でもある。余り裕かでない生活の中から莫大な費用を割いて、堂々たる鶏舎を連ね、美しく強い鶏共を養つていた。

孔叔圉が死に、其の未亡人で蒯聵の姉に當る伯姫が、息子の悝を虚器に擁して権勢を揮い始めてから、漸く衛の都の空氣は亡命太子にとって好転して来た。伯姫の情夫・渾良夫という者が使となつて度々、都と戚との間を往復した。太子は、志を得た暁には汝を大夫に取立て死罪に抵る咎あるも三度迄は許そうと良夫に約束し、之を手先としてぬかり無く策謀を運らす。

周の昭王の四十年、閏十二月某日蒯聵は良夫に迎えられて長駟都に入つた。薄暮女装して孔氏の邸に潜入、姉の伯姫や渾良夫と共に、孔家の当主衛の上卿たる・甥の孔悝（伯姫からいえば息子）を脅し、之を一味に入れてクウ・デ・タアを断行した。子・衛侯は即刻出奔、父・太子が代つて立つ。即ち衛の莊公である。南子に逐われて国を出てから実に十七年目であつた。

莊公が位に立つて先ず行おうとしたのは、外交での調整でも内治の振興でもない。それは実に、空費された己の過去に對する補償であつた。或いは過去への復讐であつた。不遇時代に得られなかった快樂は、今や性急に且つ十二分に充たさ

れねばならぬ。不遇時代に惨めに屈していた自尊心は、今や俄かに傲然と膨れ返らねばならぬ。不遇時代に己を虐げた者には極刑を、己を蔑んだ者には相当な懲しめを、己に同情を示さなかつた者には冷遇を与えねばならぬ。己の亡命の因であつた先君の夫人南子が前年亡くなつていたことは、彼にとつて最大の痛恨事であつた。あの姦婦を捕えてあらゆる辱しめを加え其の揚句極刑に処してやろうというのが、亡命時代の最も愉しい夢だつたからである。過去の己に対して無関心だつた諸重臣に向つて彼は言つた。余は久しく流離の苦を嘗め來たつた。どうだ。諸子にもたまにはそういう経験が葉だらうと。此の一言で直ちに国外に奔つた大夫も二三に止まらない。姉の伯姫と甥の孔惲とは、固より大いに酬いる所があつたが、一夜宴に招いて大いに酔わしめた後、二人を馬車に乗せ、御者に命じて其の儘国外に驅り去らしめた。衛侯となつてからの最初の一年は、誠に憑かれた様な復讐の月日であつた。空しく流離の中に失われた青春の埋合せの為に、都下の美女を漁つては後宮に納れたことは付加えるまでもない。

前から考えていた通り、己と亡命の苦を共にした公子疾を彼は直ちに太子と立てた。まだほんの少年と思つていたのが、何時しか堂々たる青年の風を備え、それに、幼時から不遇の地位にあつて人の心の裏ばかりを覗いて來たせいか、年に似合わぬ不気味な刻薄さをチャリと見せることがある。幼時の溺愛の結果が、子の不遜と父の讓歩という形で、今に致る迄残り、はたの者には致底不可解な氣の弱さを、父は此の子の前にだけ示すのである。此の太子疾と、大夫に昇つた渾良夫とだけが、莊公にとつての腹心といつてよかつた。

或夜、莊公は渾良夫に向つて、先の衛侯輒が出奔に際し累代の国の宝器をすつかり持去つたことを語り、如何にして取戻すべきかを計つた。良夫は燭を執る侍者を退席させ、自ら燭を持つて公に近付き、低聲に言つた。亡命された前衛侯も現太子も同じく君の子であり、父たる君に先立つて位に在られたのも皆自分の本心から出たことではない。いつそ此の際前衛侯を呼戻し、現太子と其の才を比べて見て優れた方を改めて太子に定められては如何。若し不才だつたなら、其の時は宝器だけを取上げられれば宜い訳だ。……

其の部屋の何処かに密偵が潜んでいたものらしい。慎重に人払いをした上での此の密談が其の儘太子の耳に入つた。

次の朝、色を作した太子疾が白刃を提げた五人の壮士を従えて父の居間へ闖入する。太子の無礼を叱咤するところではなく、莊公は唯色蒼ざめて戦くばかりである。太子は従者に運ばせた牡豚を殺して父に盟わしめ、太子としての己の位置を保証させ、さて渾良夫の如き奸臣はたちどころに誅すべしと迫る。あの男には三度迄死罪を免ずる約束がしてあるのだと公が言う。それでは、と太子は父を威すように念を押す。四度目の罪がある場合には間違ひなく誅戮なさるでしような。すつかり氣を吞まれた莊公は唯々として「諾」と答えるほかは無い。

翌年の春、莊公は郊外の遊覧地籍圃に一亭を設け、墻堦、器具、緞帳の類を凡て虎の模様一式で飾った。落成式の当日、公は華やかな宴を開き、衛国の名流は綺羅を飾つて悉く此の地に会した。渾良夫はもともと小姓上りとして派手好みの伊達男である。此の日彼は紫衣に孤裘を重ね、牡馬二頭立の豪華な車を驅つて宴に赴いた。自由な無礼講のこととて、別に劍を外しもせずに食卓に就き、食事半ばにして暑くなつたので、裘を脱いだ。此の態を見た太子は、いきなり良夫に踊りかかり、胸倉を掴んで引摺り出すと、白刃を其の鼻先に突きつけて詰つた。君寵を恃んで無礼を働くにも程があるぞ。君に代つて此の場で汝を誅するのだ。

腕力に自信の無い良夫は強いて抵抗もせず、莊公に向つて哀願の視線を送りながら、叫ぶ。嘗て御主君は死罪三件まで之を免ぜんと我れに約し給うた。されば、假令今我に罪ありとするも、太子は刃を加えることが出来ぬ筈だ。

三件とや？然らば汝の罪を数えよう。汝今日、国君の服たる紫衣をまとう。罪一つ。天子直参の上卿用たる衷句両牡の車に乗る。罪二つ。君の前にして裘を脱ぎ、劍を釈かずして食う。罪三つ。

それだけで丁度三件。太子は未だ我れを殺すことは出来ぬ、と、必死にもがきながら良夫が叫ぶ。

いや、まだある。忘れるなよ。先夜、汝は主君に何を言上したか？君侯父子を離間しようとする佞臣奴！

良夫の顔色がさつと紙の様に白くなる。

之で汝の罪は四つだ。という言葉葉も終らぬ中に、良夫の頸はがっくり前に落ち、黒地に金で猛虎を刺繡した大緞帳に鮮血がさつと迸る。

莊公は真蒼な顔をした儘、黙つて息子のすることを見ていた。

晋の趙簡子の所から莊公に使が来た。衛侯亡命の砌、及ばず乍ら御援け申した所、帰国後一向に御挨拶が無い。御自身に差支えがあるなら、せめて太子なりと遣わされて、晋侯に一応の御挨拶がありがたい、という口上である。かなり威猛高な此の文言に、莊公は又しても己の過去の惨めさを思出し、少からず自尊心を害した。国内に未だ紛争が絶えぬ故、今暫く猶予され度い、と、取敢えず使を以て言わせたが、其の使者と人れ違ひに衛の太子からの密使が晋に届いた。父衛侯の返辞は單なる遁辞で、実は、以前厄介になつた晋国が煙たさ故の・故意の延引なのだから、欺されぬように、との使である。一日も早く父に代り度いが為の策謀と明らかに知れ、趙簡子も流石に些か不快だったが、一方衛侯の忘恩も又必ず懲さねばならぬと考えた。

其の年の秋の或夜、莊公は妙な夢を見た。

荒涼たる曠野に、檐も傾いた古い楼台が一つ聳え、そこへ一人の男が上つて、髪を振り乱して叫んでいる。「見えるわ。見えるわ。瓜、一面の瓜だ。」見覚えのあるような所と思つたら其処は古の昆吾氏の墟で、成程致る所累々たる瓜ばかりである。小さき瓜を此の大きさに育て上げたのは誰だ？惨めな亡命者を時めく衛侯に迄守り育てたのは誰だ？と楼上で狂人の如く地団駄を踏んで喚んでいる彼の男の声にも、どうやら聞き覚えがある。おやと思つて聞き耳を立てると、今度は莫迦にはつきり聞えて来た。「俺は渾良夫だ。俺に何の罪があるか！俺に何の罪があるか！」

莊公は、びつしより汗をかいて眼を覚した。いやな氣持であつた。不快さを追払おうと露台へ出て見る。遅い月が野の果に出た所であつた。赤銅色に近い・紅く濁つた月である。公は不吉なものを見たように眉を顰め、再び室に入つて、氣になるままに灯の下で自ら箴竹を取つた。

翌朝、箴師を召して其の卦を判ぜしめた。害無しと言う。公は欣び、賞として領邑を与えることにしたが、箴師は公の前を退くと直ぐに倉皇として国外に逃れた。現れた通りの卦を其の儘伝えれば不興を蒙ること必定故、一先ず偽つて公の

前をつくり、さて、後に一散に逃亡したのである。公は改めて卜した。その卦兆の辞を見るに「魚の疲れ病み、赤尾を曳きて流に横たわり、水辺を迷うが如し。大国これを滅ぼし、將に亡びんとす。城門と水門とを閉じ、乃ち後より踰えん」とある。大国とあるのが、晋であろうことだけは判るが、其の他の意味は判然しない。兎に角、衛侯の前途の暗いものであることだけは確かと思われた。

残年の短かさを覚悟させられた莊公は、晋国の圧迫と太子の専横とに對して確乎たる処置を講ずる代りに、暗い予言の實現する前に少しでも多くの快樂を食らうと只管にあせるばかりである。大規模の工事が相繼いで起され過激な労働が強制されて、工匠石匠等の怨嗟の聲が巷に満ちた。一時忘れられていた闘鶏戲への耽溺も再び始まった。雌伏時代とは違つて、今度こそ思い切り派手に此の娛しみに耽ることが出来る。金と權勢とに鑒かして国内国外から雄鶏の優れたものが悉く集められた。殊に、魯の一貴人から購め得た一羽の如き、羽毛は金の如く距は鉄の如く、高冠昂尾、誠に稀に見る逸物である。後宮に立入らぬ日はあつても、衛侯が此の鶏の毛を立て翼を奮う状を見ない日は無かつた。

一日、城楼から下の街々を眺めていると、一ヶ所甚だ雑然とした陋穢な一画が目についた。侍臣に問えば戎人の部落だという。戎人とは西方化外の民の血を引いた異種族である。眼障りだから取払えと莊公は命じ、都門の外十里の地に放逐させることにした。幼を負い老を曳き、家財道具を車に積んだ賤民共が陸続と都門の外へ出て行く。役人に追立てられて慌て惑う状が、城楼の上からも一々見て取れる。追立てられる群衆の中に一人、際立つて髪美しく豊かな女がいるのを、莊公は見付けた。直ぐに人を遣つて其の女を呼ばせる。戎人己氏になる者の妻であつた。顔立は美しくなかつたが、髪の見事さは誠に輝くばかりである。公は侍臣に命じて此の女の髪を根本から切取らせた。後宮の寵姫の一人の為にそれで以て鬢を拵えようというのだ。丸坊主にされて帰つて来た妻を見ると、夫の己氏は直ぐに被衣を妻にかづかせ、まだ城楼の上になつてゐる衛侯の姿を睨んだ。役人に答打たれても、容易に其の場を立去ろうとしないのである。

冬、西方からの晋軍の侵入と呼応して、大夫・石圃なる者が兵を挙げ、衛の公宮を襲つた。衛侯の己を除こうとしてい

るのを知り先手を打ったのである。一説には又、太子疾との共謀によるのだともいう。

莊公は城門を悉く閉じ、自ら城樓に登って判軍に呼び掛け、和議の条件を種々提示したが石圃は頑として応じない。やむなく寡い手兵を以て禦がせている中に夜に入った。

月の出ぬ間の暗さに乗じて逃れねばならぬ。諸公子・侍臣等の少数を従え、例の高冠昂尾の愛鶏を自ら抱いて公は後門を踰える。慣れぬこととて足を踏み外して墜ち、したたか股を打ち脚を挫いた。手当をしている暇は無い。侍臣に扶けられつつ、真暗な曠野を急ぐ。兎にも角にも夜明迄に国境を越えて宋の地に入ろうとしたのである。大分歩いた頃、突然空がぼうつと灰黄色く野の黒さから離れて浮上ったような感じがした。月が出たのである。何時かの夜夢に起されて公宮の露台から見たのとまるでそっくりの赤銅色に濁った月である。いやだなと莊公が思った途端、左右の叢から黒い人影がばらばらと立現れて、打って掛った。剽盗か、それとも追手か。考える暇もなく激しく闘わねばならなかった。諸公子も侍臣等も大方は討たれ、それでも公は唯独り草に匍いつつ逃れた。立てなかつたために却って見逃されたのもあろう。気が付いて見ると、公はまだ鶏をしつかり抱いている。先程から鳴声一つ立てないのは、疾うに死んで了っていたからである。それでも捨て去る気になれず、死んだ鶏を片手に、匍って行く。

原の一隅に、不思議と、人家らしいもののかたまつた一郭が見えた。公は漸く其処迄辿り着き、氣息奄々たる様でとつとつきの一軒に匍い込む。扶け入れられ、差出された水を一杯飲み終つた時、到頭来たな！という太い声がした。驚いて眼を上げると、此の家の主人らしい・赤ら顔の・前園の大きく飛出た男がじつと此方を見詰めている。一向に見憶えが無い。

「見憶えが無い？　そうだろう。だが、此奴なら憶えているだろうな。」

男は、部屋の隅に蹲まっていた一人の女を招いた。其の女の顔を薄暗い灯の下で見た時、公は思わず鶏の死骸を取り落し、殆ど倒れようとした。被衣を以て頭を隠した其の女こそは、紛れもなく、公の寵姫の髻のために髪を奪われた己氏の妻であつた。

「許せ」と呟れた声で公は言った。「許せ。」

公は顫える手で身に佩びた美玉をとり外して、己氏の前に差出した。

「これをやるから、どうか、見逃して呉れ。」

己氏は蕃刀の鞘を払って近付きながら、ニヤリと笑った。

「お前を殺せば、壁が何処かへ消えるともいえるのかね？」

これが衛侯蒯聩の最期であつた。

牛人ぎゆうじん

魯の叔孫豹がまだ若かった頃、乱を避けて一時斉に奔ったことがある。途に魯の北境庚宗の地で一美婦を見た。俄かに懇ろとなり、一夜を共に過して、きて翌朝別れて斉に入った。斉に落書き大夫国氏の娘を娶つて二児を挙げるに及んで、全ての路傍一夜の契などはすっかり忘れ果てて了った。

或夜、夢を見た。四辺の空氣が重苦しく立單め不吉な予感が静かな部屋の中を領している。突然、音も無く室の天井が下降し始める。極めて徐々に、しかし極めて確実に、それは少しずつ降りて来る。一刻毎に部屋の空氣が濃く淀み、呼吸が困難になつてくる。逃げようともがくのだが、身体は寢床の上に仰向いた儘どうしても動けない。見える筈はないのに、天井の上を真黒な天が磐石の重さで押しつけているのが、はつきり判る。愈々天井が近づき、堪え難い重みが胸を圧した時、ふと横を見ると、一人の男が立っている。恐ろしく色の黒い僂僂で、眼が深く凹み、獸の様に突出た口をしている。全体が、真黒な牛に良く似た感じである。牛！余を助けよ、と思わず救を求めると、其の黒い男が手を差伸べて、上からのし掛かる無限の重みを支えて呉れる。それからもう一方の手で胸の上を軽く撫でて呉れると、急に今迄の圧迫感が失つて了った。ああ、良かった、と思わず口に出した時、目が醒めた。

翌朝、従者下僕等を集めて一々検べて見たが、夢の中の牛男に似た者は誰もいない。其の後、魯の都に出入する人々に就いて、それとなく氣を付けて見るが、それらしい人相の男には絶えて出会はない。

数年後、再び故国に政変が起り、叔孫豹は家族を齊に残して急遽帰国した。後、大夫として魯の朝に立つに及んで、始めて妻子を呼ぼうとしたが、妻は既に齊の大夫某と通じていて、一向夫の許に来ようとはしない。結局、二子孟丙・仲壬だけが父の所へ来た。

或朝、一人の女が雉を手土産に訪ねて来た。始め叔孫の方ではすっかり見忘れていたが、話して行く中に直ぐ判った。

十数年前齊へ逃れる道すがら庚宗の地で契った女である。独りかと尋ねると、倅を連れて来ているという。しかも、あの時の叔孫の子だというのだ。兎に角、前に連れて来させると、叔孫はアツと声に出した。色の黒い・眼の凹んだ・偏癩なのだ。夢の中で己を助けた黒い牛男にそっくりである。思わず口の中で「牛！」と言つて了つた。すると其の黒い少年が驚いた顔をして返辞をする。叔孫は一層驚いて、少年の名を問えば、「牛と申します」と答えた。母子共に即刻引取られ、少年は豎（小姓）の一人に加えられた。それ故、長じて後も此の牛に似た男は豎牛と呼ばれるのである。容貌に似合わず小才の利く男で、頗る役には立つが、何時も陰鬱な顔をして少年仲間の戯れにも加わらぬ。主人以外の者には笑顔一つ見せない。叔孫にはひどく可愛がられ、長じては叔孫家の家政一切の切廻しをするようになった。

眼の凹んだ・口の突出た・黒い顔は、極く偶に笑うとひどく滑稽な愛嬌に富んだものに見える。こんな剽軽な顔付の男に悪企など出来そうもないという印象を与える。目上の者に見せるのは此の顔だ。仏頂面をして考えこむ時の顔は、一寸人間離れのした怪奇な残忍さを呈する。儕輩の誰彼が恐れるのは此の顔だ。意識しないでも自然に此の二つの顔の使い分けが出来るらしい。

叔孫豹の信任は無限であつたが、後嗣に直そうとは思っていない。秘書乃至執事としては無類と考へていたが、魯の名家の当主とは、其の人品からしても一寸考へにくいのである。豎牛も勿論それは心得ている。叔孫の息子達、殊に齊から迎えられた孟丙・仲壬の二人に向つては、常に慰勸を極めた態度をとっている。彼等の方では、幾分の不気味さと多分の輕蔑とを此の男に感じているだけだ。父の寵の厚いのに大して嫉妬を覚えないのは、人柄の相違というものに自信をもっているからであらう。

魯の襄公が死んで若い昭公の代となる頃から、叔孫の健康が衰え始めた。丘猶という所へ狩に行つた婦人に悪寒を覚えて寝付いてからは、漸く足腰が立たなくなつて来る。病中の身の廻りの世話から、病床よりの命令の伝達に至る迄、一切は豎牛一人に任せられることになった。豎牛の孟丙等に対する態度は、しかし、愈々遜つてくる一方である。

叔孫が寝付く以前に、長子の孟丙の爲に鐘を鑄させることに決め、其の時に言つた。お前はまだ此の國の諸大夫と近づきになつていないから、此の鐘が出来上つたら、其の祝を兼ねて諸大夫を饗應するが宜からうと。明らかに孟丙を相続者と決めての話である。叔孫が病に臥してから、漸く鐘が出来上つた。孟丙は、かねて話のあつた宴會の日取の都合を父に聞こうとして、豎牛に其の旨を通じて貰つた。特別の事情が無い限り、豎牛の外は誰一人病室に出入出来なかつたのである。豎牛は孟丙の頼を受けて病室に入つたが、叔孫には何事も取次がない。直ぐ外へ出て来て孟丙に向い、主君の言葉として出鱈目な日にちを指定する。指定された日に孟丙は賓客を招き盛んに饗應して、其の座で始めて新しい鐘を打つた。病室で其の音を聞いた叔孫が怪しんで、あれは何だと聞く。孟丙の家で鐘の完成を祝う宴が催され多数の客が来ている旨を、豎牛が答える。俺の許も得ないで勝手に相続人面をするとは何事だ、と病人が顔色を変える。それに、客の中には齊にいる孟丙殿の母上の關係の方々も遙々見えている様です、と豎牛が付け加える。不義を働いた曾ての妻の話を持出すと何時も叔孫の機嫌が見る見る悪くなることを、良く承知しているのだ。病人は怒つて立上ろうとするが、豎牛に抱きとめられる。身体に障つてはいけないというのである。俺が此の病でつきり死ぬものと決めて掛かつて、もう勝手な真似を始めたのだなど齒咬みをしながら、叔孫は豎牛に命ずる。構わぬ。引捕えて牢に入れろ。抵抗するようなら打殺しても宜い。宴が終り、若い叔孫家の後嗣は快く諸賓客を送り出したが、翌朝は既に屍体となつて家の裏藪に棄てられていた。

孟丙の弟仲壬は昭公の近侍某と親しくしていたが、一日友を公宮の中に訪ねた時、偶々公の目に留つた。一言二言、その下問に答えている中に、氣に入られたと見え、歸りには親しく玉環を賜わつた。大人しい青年で、親にも告げずに身に佩びては悪からうと、豎牛を通じて病父に其の名譽の事情を告げ玉環を見せようとした。牛は玉環を受取つて内に入つたが、叔孫には示さない。仲壬が来たということさえ話さぬ。再び外に出て来て言つた。父上には大変御喜びで直ぐにも身に着ける様にとのことでした、と。仲壬はそこで始めてそれを身に佩びた。数日後、豎牛が叔孫に勧める。既に孟丙が亡い以上、仲壬を後嗣に立てることは決つてゐる故、今から主君昭公に御目通りさせては如何。叔孫がいう。いや、まだそれと決めた訳ではないから、今からそんな必要はない。しかし、と牛が言葉を返す。父上の思召はどうあらうと、息子

の方では勝手にそう決め込んで、最早直接君公に御目通りしていますよ。そんな莫迦な事がある筈は無いという叔孫に、それでも近頃仲王が君公から拝領したという玉環を佩びていることは確かですと牛が請け合う。早速仲王が呼ばれる。果して玉環を佩びている。公からの戴きものだと云う。父は利かぬ身体を床の上に起して怒った。息子の弁解は何一つ聞かれず、直ぐに其の場を退いて謹慎せよという。

其の夜、仲王はひそかに斉に奔った。

病が次第に篤くなり、焦眉の問題として真剣に後嗣のことを考えねばならなくなった時、叔孫豹は矢張仲王を呼ぼうと思つた。豎牛にそれを命ずる。命を受けて出ては行つたが、勿論斉にいる仲王に使を出しはしない。早速仲王の許へ使を遣わしたが非道なる父の所へは二度と戻らぬという返辞だったと復命する。此の頃になつて漸く叔孫にも、此の近臣に対する疑いが湧いて来た。汝の言葉は真実か？と屹として聞き返したのは其の為である。どうして私が偽など申しましよう、と答える豎牛の唇の端が、其の時嘲るように歪んだのを病人は見た。こんな事は此の男が邸に来てから全く始めてであつた。カツとして病人は起上ろうとしたが、力が無い。直ぐ打倒れる。其の姿を、上から、黒い牛の様な顔が、今度こそ明瞭な侮蔑を浮かべて、冷然と見下す。儕輩や部下にしか見せなかつたあの残忍な顔である。家人や他の近臣を呼ぼうにも、今迄の習慣で此の男の手を経ないでは誰一人呼べないことになっている。其の夜病大夫は殺した孟丙のことを思つて口惜泣きに泣いた。

次の日から残酷な所作が始まる。病人が人に接するのを嫌うからとて、食事は膳部の者が次室迄運んで置き、それを豎牛が病者の枕頭に持つて来るのが慣わしであつたのを、今や此の侍者が病人に食を進めなくなつたのである。差出される食事は悉く自分が喰つて了い、からだけを又出して置く。膳部の者は叔孫が喰べたことと思つている。病人が餓を訴えても、牛男は黙つて冷笑するばかり。返辞さえ最早しなくなつた。誰に助を求めようにも、叔孫には絶えて手段が無いのである。偶々此の家の宰たる杜洩が見舞に来了。病人は杜洩に向つて豎牛の仕打を訴えるが、日頃の信任を承知している杜洩は冗談と考へててんで取合わない。叔孫が尚も余り真剣に訴えると、今度は病熱のため心神が錯乱したのではないかと、い

ぶかる風である。豎牛も亦横から杜洩に目配して、頭の惑乱した病者にはつくづく困り果てたという表情を見せる。しまいに、病人はいら立って涙を流しながら、瘦せ衰えた手で傍の劔を指し、杜洩に「之であの男を殺せ、殺せ、早く！」と叫ぶ。どうしても自分が狂者としてしか扱われないことを知ると、叔係は衰え切った身体を震わせて号泣する。杜洩は牛と目を見合せ、眉をしかめながら、そつと室を出る。客が去つてから始めて、牛男の顔に得体の知れぬ笑が微かに浮かぶ。餓と疲れの中に泣きながら、何時か病人はうとうとして夢を見た。いや、眠ったのではなく、幻覚を見ただけかも知れぬ。重苦しく淀んだ・不吉な予感に充ちた部屋の中、ただ一つ灯が音も無く燃えている。輝きの無い・いやに白っぽい光である。じつとそれを見ている中に、ひどく遠方に——十里も二十里も彼方にあるもののよう感じられて来る。寝ている真上の天井が、何時かの夢の時と同じ様に、徐々に下降を始める。ゆつくりと、併し確実に、上からの圧迫は加わる。逃れようにも足一つ動かせない。傍を見ると黒い牛男が立っている。救を求めても、今度は手を伸べて呉れない。黙つてつ立つた俤にやりと笑う。絶望的な哀願をもう一ど繰返すと、急に、怒つたような固い表情になり、眉一つ動かさずに凝乎と見下す。今や胸の真上に被いかぶさつて来る真黒な重みに、最後の悲鳴を挙げた途端に、正気に返つた。：

何時か夜に入つたと見え、暗い部屋の隅に白っぽい灯が一つともっている。今迄夢の中で見ていたのは矢張この灯だつたのかも知れない。傍を見上げると、これ又夢の中とそっくりな豎牛の顔が、人間離れのした冷酷さを湛えて、静かに見下している。其の貌は最早人間ではなく、真黒な原始の混沌に根を生やした一個の物のように思われる。叔係は骨の髄まで凍る思いがした。己を殺そうとする一人の男に対する恐怖ではない。寧ろ、世界のきびしい悪意といった様なものへの、遜つた恐れに近い。最早先刻迄の怒は運命的な畏怖感に圧倒されて了つた。今は此の男に刃向おうとする氣力も失せたのである。

三日の後、魯の名大夫、叔孫豹は餓えて死んだ。

ハゲワシ

貪婪飽くなき、とか、一物も残さぬ強慾とか。とくに弱りかけてよろよろしている人物に襲いかかつてそういうことをやるのをさして「ハゲタカのような」という。不況期にはよく耳にするし、不況期でなくてもしばしば聞かされる慣用語である。まったく日本語の慣用語になりきっていて、誰も疑うものがないし、私も永いあいだそうだった。その慣用語を見ると、ハゲタカという鳥は日本に棲む鳥ではないのに、まるでスズメのように習性を知りぬかれたかのような扱いである。

しかし、たまたま数年前に鳥の本を読んで、ハゲタカという名の鳥は地上のどこにもいないのだと知らされた。それは日本人の勝手な造語であって、英語の「Vulture」を日本語に訳すときに起った誤ちであろうと、学者はいう。「ハゲワシ」はアメリカにもアフリカにもいるけれど、「ハゲタカ」という鳥は存在しないのだそうである。ちよつと調べてみたところではつぎのようになる。「ワシタカ目」という「目」があつて四つにわかれ、コンドル科、ヘビクイワシ科、ワシタカ科、ハヤブサ科となる。これらの「科」のそれぞれにたくさん「属」があり、たとえばコンドル科なら、コンドル属、クロコンドル属、トキイロコンドル属その他。ワシタカ科なら、トビ属、ノスリ属、クマタカ属などとあり、ハゲワシはここに入っていて、クロハゲワシ属、シロエリハゲワシ属、エジプトハゲワシ属、その他である。これらの「目」、「科」、「属」のどこをさがしても「ハゲタカ」という名は記されていないのである。

ために昭和五十年版の『新コンサイス英和辞典』で「Vulture」をひいてみると、つぎのようになっている。

- 1、(鳥) ワシタカ科「コンドル科」の大きな鳥。(死肉を食う)。
- 2、〔人を食ひ物にする〕強慾な人。

これではその鳥がワシタカ科なのか、コンドル科なのか、けじめがつかないが、もともと「Vulture」という単語その

ものが両科の死肉をあさる大型の猛禽と、そのようなシャイロック風の人物をさす俗語であつて、分類学用語ではないのだから、いたしかたない。むしろその翻訳は正確をめざしていて慎重であり、従来「ハゲタカ」という名をさりげなく一掃しているあたり、ポケット版の辞書としてはよくやつてるといいたい精緻さであろう。

アフリカ西海岸へ戦争を観察にでかけ、後方でも最前線でもハゲワシを目撃したが、野外でこの鳥を見るのはそれをはじめのことだった。そこで書棚から、当時、新聞社の週刊誌に送った文章を収録した本をとりだして、あらためて調べてみると、やっぱり私は通念通りにその鳥のことを「ハゲタカ」と書いている。アマゾン河畔では毎日、ウルブーと呼ばれる、残飯漁りに余念のない鳥を見かけたが、その鳥のことは「ハゲワシ」と書いている。二つの誤ちを私は犯しているのである。「ハゲタカ」と書いたアフリカの鳥は「ハゲワシ」と書くべきであつたし「ハゲワシ」と書いたアマゾンの鳥は「クロコンドル」と書くべきであつた。そのうえ腹立たしいのは私の記憶が朦朧としていて、図鑑でクロハゲワシ、シロエリハゲワシ、エジプトハゲワシと、それぞれの生態写真を見せられても、私の目撃したのがどれだったか、まったくけじめがつかないのである。アマゾン河畔で見たウルブーはどうやらクロコンドルであつたらしいと、薄明のなかをまさぐつて見当がついたが、これはまだ一年そこそこの記憶だからである。

羽根の色や模様についての記憶は私から剥離するか、おぼろになるかしてしまつたけれど、たまたまいについては二種ともおぼえている。ハゲワシもクロコンドルも死肉や残飯をあさつて暮らしていて、その点は世評通りであるが、意外に慎重であり、用心深く、また忍耐強いのである。そこが予想に反する点で、注意をひきつけられる。たとえば北海道の海岸に棲むハシブトガラスと呼ばれるカラスは、漁港の岸壁に積みあげられたトロ箱のホッケやスケソウダラを盗んで暮しているが、人がいても平気である。すぐそばで漁師がいそがしく動きまわつてもこのカラスはまったく恐れなない。平気でトロ箱からトロ箱へ飛びまわつて魚をかすめとり、いくら追つてもしぶとくしつこくつきまとつて逃げないのである。これくらい図々しくて大胆で貪婪な鳥はいない。そんな現実主義者のくせにピカピカ光る物には目がなくて、何の役にもたたないのにビールの栓やガラスのかげらなどを見つけると後生大事に巣へ持つて帰るといふところがおかしい。釣竿を片手に原野を歩きまわつていてそんな巣を見つけると笑わずにはいられないのである。しかし、海岸へ出て吹雪の漁港で

しぶとく漁師につきまといていて、微笑は消える。

アマゾン河畔のクロコンドルはカラスより一回りか二回りぐらい大きいという程度の大きさで、坊主頭ではあるけれど皮膚はむきだしになっていず、短い粗毛があつたように思う。河港や町にはこの鳥がいたるところにいて、ごくありふれたものである。誰も注意しないし、石を投げるものもない。教会や市場の屋根にたくさんとまって黙りこんでいるところを見ると、鳥というよりは何かの大きな果実のようである。彼らは人がいると、そこからちよつとはなれたところにとまり、よそ見したり、羽根をつくろつたりしている。いつまでもそうやって忍耐強く待ちつづけ、人がいなくなるとヨチヨチ寄つていく。歩き方は下手で、肩をゆすりゆすり、ヨチヨチと歩くのである。姿がちよつとカラスに似ているので、冬の北海道の漁港の光景を思いださずにはいられないけれど、ハシブトガラスの凶々しさや厚顔はこの鳥には見られない。毎日どこかでかならず私はこの鳥を見かけたのだが、鳴声を聞いた記憶がまったくのこっていない。温和で、勤勉で、寡黙な、影のような掃除屋としての姿態が思いだせるだけである。しかし、この鳥は肉食の猛禽で、容赦ない捕食者なのである。河畔の市場で残飯屋や掃除屋をするのは、おそらく餌が豊富にころがつていて安易に入手できるからそうするまでのことである。目撃者から聞かされたところでは、原野そのもののような牧場で飢えに迫られたら、この鳥はハイエナやライオンやヒトとまったくおなじ行動にでる。病気が傷かでよろめいているウシを見つけるとこの鳥は襲いかかつて傷口を嘴で掘る。肛門から腸をひきずりだす。ウシが倒れると寄つてたかつて皮を剥ぎ、肉を剥ぎ、巨大な鳥籠のようになつた肋骨のなかに出入りして、一片のこらず肉をむしりとりてしまう。欧米や日本からの移民が神経症に陥ちこんで家出して行方不明になると、ジャングルの上空のどこかにこの鳥が舞っていないかどうかと眺め、もし舞つていたらそれを目印にして探索に出かけたらいいといい慣らされている。

回想のなかのアフリカ西海岸は濡れている。湾、ヤシ並木、道、市場、壁、空地、薄暗い灌木林、何もかもが濡れている。毎日、毎日、朝から雨が降り、それもじゃぶじゃぶと降り、ぴしゃぴしゃと降り、ときどきししと降つた。空いちめんに、厚い、しぶとい雨雲が張りつめ、低くおりてきて町と森を抑圧し、いつも朝が黄昏のようだった。ときたま雲が切れると、その穴が干潮時の海岸の潮溜りのように輝き、ギラギラと灼熱の日光が射す。そんなときに町を歩いている

と、壁や道からまるで蒸気のように湯気と陽炎がふきだしてむらむらとゆらめき、たちこめる。一触れただけでたちまちシャツが崩れる。腕がカエルの膚のように湿ってくる。雨期の暗鬱な精力があたりに一ミリの空白もなくぎっしりとたちこめていて、タバコの煙までが口から出た瞬間にじつとりと湿り、湿度・一〇〇%という言葉をよく聞かされる。それは手をにぎって開いてみたらたつたそれだけのことで掌に水が溜まり、あちらこちらに水滴が光っているというようなことなのである。ホテルは空調してあるはずだが、涼しく乾いているのは廊下を歩いているときだけで、部屋に入るとすでに湿気が先回りして入りこみ、粥のように濃んでいる。ボーイがとりかえたばかりのシャツがもう水を吸って海綿のようになっている。そこに寝ころんでウイスキーをすすっていると、思惟は、甘くふやけた肉のなかで、即興も、体系も、芽をだした瞬間から形を失ってしまい、私は濡れた藁だった。

憂愁はとらえようなく無為からも出てくる。ここへ到着したその日に私は対外文化省の情報部へ出頭し、最前線視察の申請書を提出したのだが、何日たっても許可がおりないのである。毎日、午前一回、午後一回、情報担当官に会いに出かけるけれど、いついつても留守である。いつ見てもその部屋はがらんどで、電話、タイプライター、書類戸棚など、何も無い。剥きだしの荒涼としたコンクリートの古箱のなかに傷だらけの机と椅子が一つあるきりで、ゴム糊の瓶が一つころがっている。錆びたスプリングがとびだしているのを椅子のなかにおしこみ、それにすわってしばらく待つてみるが、情報官はもどってこない。ときどき廊下をいく通行人がドアからのぞきこみ、黒い顔のなかで純白の長い歯を閃かし、思わず見とれたくなるような親しきで何か話しかけてくるが、ただそれだけのことで、ゴボゴボ笑いの声をのこしてフツと消えてしまう。黒人特有の窒息しそうな体臭のたちこめる暗い廊下を歩いて町の人ごみに出ると、道ばたにボロボロの五色の傘をさして女たちがうずくまり、タバコを一本ずつ、マツチを一本ずつ、角砂糖を一個ずつ売っている。ホテルは白色セメントと鋼鉄とガラスで構築された高層の長方体だが、芝生を敷きつめたそのガーデンの垣根の外には無数のマツチ箱のような掘立小屋がひしめき、尿と残飯と垢、それにラゴス湾の泥まじりの濃み潮の匂いがたちこめている。部屋にもどって雨に濡れたシャツのままベッドにころがってウイスキーをすすりすすり、うるんだ眼で裏庭を眺めると、そこに何羽ものハゲワシがいた。木陰の垣根に彼らは一メートルおきぐらいに一羽ずつとまっていた。何羽かは垣根をおりて、肩を

ゆすりゆすり、あたりをゆつくりと歩きまわっている。

垣根にとまっているのは何かを注視しているようであり、注視しつつ眼をそらしているようでもある。見て見ぬふりをしているようなのだ。そこで、彼らの視線をたどっていくと、ホテルのキッチン裏口がそこにあり、ゴミ箱がわりにドラム罐がいくつとなくおいてある。黒人の長身のコックが口笛を吹きつつ出たり入ったりしている。コックの姿が消えてしばらくたつとハゲワシは用心深く一羽、二羽と垣根からおり、ヨチヨチとした足どりで残飯をあさりに寄っていく。コックが出てくるとあわてて垣根へもどっていく。ウイスキーにそそのかされた私が眠りこみ、しばらくして眼をさまし、黄昏の漂う裏庭を見ると、鳥たちは薄暮のなかであいかわらず垣根にとまり、果実のように黙りこんでいる。何日も何日も私はウイスキーをすすりつつ窓を眺めるしかない日を送ったのでこの鳥の姿態とすっかりなじみになった。彼らはうんざりするほど忍耐強く、しぶとくて、用心深くもあれば、寡黙でもある。コックがドアの向うに消えてしばらくは出てこない、よくよく見きわめがつくまで、彼らはうごこうとしない。コックのなかにはときどき残飯をバケツからつかみだして投げてやるものがあつたが、鳥たちはそれを見ても公園のハトのようにいちどきに駆けつけることはせず、眼をそらして、見て見ぬふりをしながら、何となくあたりをよたよたと歩きまわり、コックが消えるのを待つのである。餌のあさりかたはガツガツしているけれど、とくにきわだつて残忍とか冷酷とかいうわけではない。しかし、なかなかの大食家であつて、一物ものこさない徹底ぶりで平らげるといふことでは、まさに掃除屋という世評の通りであつた。もしこの鳥や、ハイエナや、ジャッカルが、死肉、腐肉を掃除してくれなかったら、とつくにアフリカは疫病で死滅していたのではあるまいか。

パリかジュネーヴへ引揚げようかと思ひかけた頃になつてやつと許可証が出たので、それを持つて飛行機に乗りこみ、ポルト・ハーコートへいった。そこに軍の司令部があつて、最前線を視察したいというと、二日後に案内の士官、護衛兵二人、ジープを一台、提供された。当時、戦争は二歳と三カ月に成長していたけれど、ローマ法王が隣国へ調停にきていたので、ナイジェリア政府もビアフラも戦闘行為を一時的に中断していた。ビアフラは不毛の内陸部に封じこめられ、完全に包囲され、陸路と水路の一切を断たれ、絶糧状態に陥ちこんでアリやミミズを食べていた。カトリックとプロテスタン

トの宗教団体が合同で旧式の小さなプロペラ機でときれときれに食糧や医薬品をビアフラに運びこんでいるが、決死の作業なのにおまじないにもならない。あちらこちらの藪に捨てられた老人、子供、女などがトラックやジープに積まれて最前線の仮小屋へ運びこまれてくるが、肉体というよりは黒い枯木である。二十歳の娘が六十歳の老婆のように見え、子供の手や足はマッチの軸のように細かった。三角形のおにぎりのような頭を細い首が支えているのだが、たいていは剥きだしのコンクリートの床によこたわっている。息をしているのかいないのかもよくわからず、白くて大きな眼をひらくことはひらいていないけれど、視線はとつと外界から剥離してしまっているらしく、眼前で何がうごいても微動もしない。無数の雨の拳がトタン板の屋根をたたき、薄暗い小屋には尿と糞の分解する匂いがたちこめ、よこたわった子供たちは水の汚みか影としか見えない。

中年の黒人の管理人が、

「これはストッパーというのです」

皺だらけの掌にプラスチック製の押しピンのような形をした物をのせて、見せてくれる。極度の栄養失調で子供や老人のからっぽの腹は腸を支える力を失っているで、ほっておくと肛門がひらいて、そこから腸がずり落ちて、死んでしまふから、そうならないようにこれを肛門につっこんでおさえておくのだという。ビアフラ政府の要望で宗教団体がヨーロッパのどこかの工場で作って搬入し、それを老人や子供に配給したのだという。

「……しかしですね、これを尻の穴につっこんでも、ほっておけば落ちてしまふ。これを尻の穴につっこんで、そのうえ手でおさえておかなければ何にもならんです。歩いたり、すわったり、寝ころんだりするとき、ずっと手でおさえていなければ、意味がないんです。それだけの体力と魂の力がある子供ならこれは必要じゃありませんよ」

管理人は身ぶり手ぶりで尻をおさえる真似をし、尻を手でおさえて歩く真似をし、なかなか巧みであったが、下品な話だと感じているのか、羞恥のためにいらだって、いささか早口にそう語った。黒人が顔を赤らめると紫色に見える。黒い青銅のようにくすんだり光ったりしているその皮膚が紫色になるのである。

ひっきりなしのどしゃ降りの雨と、ときたまのガラガラ照りの白熱とが交錯するなかをジープであちらへ行き、こちら

へ行きして、こうした異界を見て歩いたのだが、どこへいっても白人の娘や青年の国際赤十字員が勤勉に働いていた。赤十字は政治、宗教、人種の別なく透明な人間愛からわれわれを支援すると同時にビアフラを支援もしている。そのことによつて君たちは結果として戦争を長引かせているのである。すなわち、君たちはアフリカが分裂した弱い国であることを望む旧植民地主義者とおなじなのである。赤十字よ。家へ帰れ。ナイジェリア政府はそういう声明をだした。赤十字諸君は政治、宗教、人種の別なく透明な人間愛からわれわれを支援すると同時にわれわれを虐殺する政府軍のヴァンダルども（野蛮人ども）をも支援している。その結果としてアフリカ人の血は流れつづけて止まらないのである。赤十字よ。家へ帰れ。ビアフラもそういう声明をだした。抗争する双方から赤十字は憎まれたのだったが、双方の現場であえいでいる極貧の老人や女や子供たちに栄養剤を飲ませ、注射をうち、眼に薬を塗つてやっているのは赤十字員だけであつた。双方の指導者たちにこの子供たちが赤十字について何をいうか、その意見を聞いてみたいと思うことがある。しかし、また、ビアフラ側では十二歳の少年から五十七歳までの老人が総動員されていて、住民を戦闘員と非戦闘員に分類することができない状態にあるのだから、赤十字に注射をうたれたためにブッシュで餓死するはずだった少年がよみがえつて銃を手にして出かけていつて政府軍の兵を殺し、ひよつとすると自分も死んでしまうかもしれないのである。戦場から帰還する兵士の心身を癒やしてやつて心ならずも再び戦場へ送り返すのが後方の家族たちの役割なのだから、戦闘員の定義をちよつとひろげれば、家族も戦闘員なのであつて、非戦闘員だとはいえないのである。これは石器時代から一貫してそうだったのだから、全体戦争は今世紀だけの、コミュニストたちだけの、レジスタンス員だけの発明ではあるまい。戦場というものがクツキリと眼に見える特殊地域であるという感覚に慣らされていたヨーロッパ人が、技術の発達によつて、榴散弾の毒ガスだのという無差別殺傷の惨状を目撃してふいに石器時代が再来した事実を知つて愕然となり、赤十字を創始したわけだが、それ以後、東西南北、ありとあらゆる戦争はいよいよ全体戦争となるばかりで、いよいよ戦闘員と非戦闘員のけじめがつかなくなるばかりである。むしろ、赤ン坊から老婆まで一人のこらずがわれらの戦士であると誇らかに揚言するイデオログたちがあらわれ、そういうながら赤ン坊や老婆が殺傷されると敵を「非人間的」とのしる。そこで非人間的な戦闘員が村へ入つていつて虫のような老婆につい同情して銃口を向けないどころか、うっかりチョコレートなどをさし

だすと、老婆はうつむいてそれをうけとり、よちよちと小屋のうしろへ這つていつて、指向性地雷のスイッチをひねつて、その戦闘員を手も足もはじめがつかないまでに粉砕する。赤い灼熱の瞬間を知覚するかしないかに、何の苦しみもあたえずに、蒸発させてしまうのである。そして、この老婆が、どうかして街道をよろよろとさまよい歩き、テントに迷いこんで回虫を訴えたら、赤十字はたちどころに薬をあたえることであろう。

ジュネーヴの国際赤十字の本部の二階の大きな会議室の、白い、清潔な壁には、巨大なアフリカの地図とナイジェリアの地図がかけられてあった。二つの地図のいたるところにピンが刺さっていて、赤十字の分遣所を示していた。ビアフラの飢餓の概況を解説したあと、本部長は、血色のいい、薔薇色の、大きな禿頭を伏せ、あまりにも政治的で、あまりにも技術的で、あまりにも隙のないこの時代に赤十字の活動は時代遅れではないかという意見があり、私にも個人的意見がないわけではないのですが、いまは申上げません。まずあなたは現地へおいでになって自分の眼で見て来て下さい。無事にお帰りになることを祈っていますと、丁重な口調で呟いた。ここへきてジープであちらこちら見て歩き、名のあるような、ないような、密湿な小暗い密林のはずれの町で、金髪の白い娘が水枕のように腹ばかりふくれた黒い子を、コンクリートの床に寝かせて、注射をうったり、体温を測ったりしているのを見た。娘は眼のしたに指でえぐったようなくまをつくり、へとへとに疲れていることが、一瞥してわかった。彼女は小屋を出ていきしなになだれたまま、小声で、私が何もいってないのに、

「私はしたいからしているのです」

と呟いて、消えた。その声は細くて、息切れがし、茫然としていて、焦点がなかったけれど、どこかしら、時代が違つたらリヴィングストン探検隊の一員になっていたのではないかと感じこませられるようなものがあつた。

毎週、日曜日ごとにのまなければいけないマラリアの予防薬の副作用がきつくて、いつも頭痛、吐気、眩暈にしぶとくつきまとわれる。体内のどこかに軋む音がしなかったり、霧もかかつていないという日は週のうちに一日もない。そこへ雨よけのために幌を張ったジープの内部には黒人兵の垢まじりの濃烈な体臭がたちこめ、いつまでたつても慣れることができない。悪臭の粥に全身でおぼれこんで浮いたり沈んだりしているようなのだ。彼らがゴボゴボと咽喉で音をたてて笑

うときには、その野太いバスの声には恍惚としたくなるような親和の包容力があるのだが、体臭がうごく、思わず嘔く、失神してしまいたくなるのである。つぎの町か難民収容所についてふらふらとジープからおりるたびに私は涼しい高原や、日光に輝く広闊な大平原や、昼寝にふけるライオンの群れなどをどれだけ見たかったか知れない。しかし、どこまでいっても、いけばいくほど、登場するのは飢えた子供、たちこめる尿臭、よこたわったきりの老人たち、破壊された町そしてこれらのどこか近くの木の枝で黙りこくって待機しているハゲワシの姿である。肉か、残飯か。つまりそういうものをつくる人間のいるところにきつとこの鳥はやってきて、順番がくるのを雨のなかでしぶとく待ちつづける。この鳥をさがせばそこには何かがあると、私の視線も反射的にうごくようになった。

この地帯には高原もなく、大平原もなく、火口原野もない。みずみずしい汁液をたたえた草がふさふさと見わたすかぎり茂ってカモシカやシマウマがあちらこちらで寛大な食事を愉しむ光景はまったく期待できない。アフリカもこの地帯を訪れた人は野生の獣を一頭も目撃しないで帰国することになる。もしくははしたたかケと、アノフェレス蚊と、黙りこくったハゲワシだけを見て帰国することになる。昼も暗い、のしかかるような、大伽藍さながらのジャングルが広がり、その底に一本の細い道が切ってあって、ジープが凄い体臭と自分たちで勝手に文法をつくりかえたという英語の奔放なおしやべりをのせて突進していくのだが、ジャングルは蒼暗で深広な静寂をたたえて雨に濡れるままであり、鳥の声も猿の叫喚もとどろかない。ジャングルがあるのにここには砂漠の静寂がある。雨の降る砂漠の静寂があるのだ。一度、私はにぶくてしぶといマリア剤の頭痛と白想にふけりつつ揺られていくうちに、どしや降りのフロント・グラスをかきわけると、バーの腕が右へ走った瞬間に、前方の太木の枝に二、三羽のハゲワシがとまっているのを見た。そして期待していると、何百メートルか走ってから、森のなかに小さな空地があり、何軒かの掘立小屋があるのを右に見た。通過する瞬間に見ると、空地のまんなかで一人の男が長い山刀を手にしてたち、何人もの黒人の男女がその男をとりかこんでいて、その群衆のまんなかにくつもの小さな肉の山が並べられているのを見た。つぎの瞬間にこの光景は消えたが、期待がみたされたので私は頭痛の霧のなかで、深い、単純な満足をおぼえた。その満足が単純だったので私はさらに満足をおぼえた。

アバという小さな町があった。

昨年、ここでは激しい市街戦がおこなわれ、退去命令がだされたので、住民は一人もいない。アフリカ西海岸の草深い田舎町として見ると放送局のアンテナが二本も、それもあまり日数のたつてないのが、空に高く刺さっているのだから、かなり繁栄していた町ではあるまいかと思われる。ガソリン・スタンド、バー、食料品店、映画館など、どれも小さくつつましやかなものだが、ことごとくドアを破られ、窓を砕かれ、壁は弾痕で穴だらけになっている。住民があわてて逃げだし、同時にどうやら掠奪も旺盛におこなわれたらしくて、この静かなゴースト・タウンの道路には、聖書、ベッド、空瓶、椅子などがひっくりかえるままになって雨にうたれている。一年のうちにすでにただけしい茎を持った雑草がはびこり、あちらこちらで音もなくアスファルトを崩したり、破ったり、罅入らせたりしている。ジュネーヴにはビアフラの海外情報部とヴィザ申請の窓口を兼ねる小さな通信社があり、そこで私は昨年一年分のビアフラ発の電文の綴り込みを買い、読みつけてきたのだが、大半のニュースは《アバ発》となっていたから、かなりの期間この町は叛乱の神経中枢になっていたのだと思う。この町のどこかで誰かがキーをたたいて飽食と冷感症と弛緩の外界に訴えつけたわけだが、いまは尿の匂いもなく、風の音もない。歩く影もないし、ゴボゴボ笑いの声もない。からっぽの乾いた溝に厚いオックスフォードの辞書が落ちていたので案内の中尉がひろいあげ、ジープへ入れておけといつて、護衛兵にわたした。彼は兵をつれてあちらこちらの家に入りし、石油コンロや、ガス・レンジや、椅子など、かたっぱしからひろってジープに積みこませた。

彼は椅子を注意深く吟味しつつ、

「私はもうすぐ結婚するんでね」

と呟いた。

このゴースト・タウンを歩きまわっているうちに、あるところで私は、ふと、道ばたの木に四羽のハゲワシが枝にとまっているのを見かけた。彼らはいつものように胸を大きくふくらませ、黙りこくつて、じっとしていた。この、からっぽの、無機質の、肉も汁も匂いもない町にどうしてだろうと、いぶかしんでいると、しばらくして道の反対側から二人の若い女があらわれ、中尉と私にむかつて陽気な声をかけ、にこにこ笑いながら手をふった。娼婦であるらしかった。彼女た

ちはこの無人の廢虚に住みつき、ときたま訪れる人を小屋に誘いこんで、暮しているらしかった。女が住んでいるのなら、当然、残飯がでるはずである。ハゲワシたちは早くもそれを嗅ぎつけ、道一つをへだてて、順番がくるのを待っているのだった。撥刺とした娘たちの声を聞きながら、はじめて私はこの鳥に気味悪さをおぼえさせられた。その無類の正確さと、寡黙と、執拗さに、それまでの慣れなれしさが消えて、底深い畏怖がしみだしてきた。

雨は降りつづけた。海岸に、ジャンゲルに、難民収容所に降りつづけた。ある収容所では約一万二千名からの難民を収容していたが、あちらこちらに急造の粗末なバラックを建てたけれど、収容しきれず、はみだした人びとは軒下や戸口に立ったりしゃがんだりして空から落ちてくる大河のしぶきを眺めていた。彼らの世話を見ている福祉員は私にストツパーを見せ、帳簿を見せてくれた。そこに難民たちの年齢や職業が書きこんであつて、大半は農民だけれど、ほかに商人、教師、仕立屋、床屋、新聞記者、印刷工、大工、楽士、測量士、写真屋、牧師……ほとんど思いつけるかぎりの職業名が書かれてある。しかし、どれもこれも黒い骸骨に皺だらけの皮がかぶせてあるだけで、農民と新聞記者、大工と牧師のけじめなど、つけようにもつけようがない。剥きだしのコンクリート床にゴザ一枚を敷いて人びとはよこたわり、その枕もとにはトマトジュースの空罐が一つおいてあるぐらいで、鍋、皿、スプーンなど、世帯道具は一つもない。壁にチョークで「ヘンリーの場所」、「ジャクソンの場所」などと下手な英語でなぐり書きしてあり、人びとは「あちら側」から名前だけ持つて流亡してきたことが一瞥で知れる。あるバラックでは祈祷をしているさなかであつたが、人びとはぐつたりよこたわつたままで、ときどき「アーメン！」と呻く。その合唱の声は軒さきに音たててしぶく雨に消されて森へ流れていかない。しぶきの滝を通過する力がない。流れもせず、澱みもしない。ただ、その場で消える。

福祉員が帳簿を見ながら、

「……毎日、約百名から二百名の難民が運ばれてきます。先週ここでは男が二人死にました。女が二人死にました。女の子が一人生まれました。子供が十人死にました。これまでに子供が何人死んだか、数えきれません。たくさんです。たくさん。たくさん」

尿と糞の匂いのたちこめる薄暗い小屋の床のあちらこちらに水の汚点が見えるが、それは子供だった。ちょうど一人の

子供が死んだところだった。べつの福祉員が小屋に入ってきて死体をゴザに包み、細紐で十字にからげた。子供でかさばっているのは頭蓋骨と肋骨と腰の骨盤ぐらいで、手や足を折りたたんでゴザで包むと、片掌に楽らくと乗るくらいの小包みにしかならない。福祉員はその小包みを指にぶらさげ、古びた鍬を持って戸外に出ていった。

その後姿を見送っているうちに軒さきすぐのところにはゲワシがとまっているのを見た。一本の木がたくましい枝を小屋の軒さきにのばしている。そこに五羽のハゲワシがとまっていた。その強大で鋭い嘴の角質、それが古びてかすかな皺がより、罅が入っているのがまざまざ見えるくらいの近さに彼らはとまり、黙って小屋のなかを覗きこんでいた。私と視線が会うと彼らはさりげなく眼をそらして遠方を眺めた。小包みと鍬を持って森のほうへ雨のなかを歩いていく男の後姿を二羽がじつと眺めていた。雨のなかで身じろぎもせず、彼らは宮殿の不壊の彫像のようにそこにとまり、尿と肉の甘い匂いの航跡を追って、いつまでもその方角を眺めている。

観画談 かんがだん

ずっと前の事であるが、ある人から気味合の妙な談を聞いたことがある。そしてその話を今だに忘れていないが、人名や地名は今既に林間の焚火の煙のように、どこか知らぬところに逸し去っている。

話をしてくれた人の友達に某甲という男があった。その男は極めて普通人型の出来の好い方で、晩学ではあったが、大学も二年生まで漕ぎ付けた。というものはその男が最初甚だしい貧家に生れたので、思うように師を得て学に就くという訳には出来なかつたので、田舎の小学を卒すると、やがて自活生活に入つて、小学の教師の手伝をしたり、村役場の小役人みたようなことをしたり、いろいろ困苦勤勉の離型その物のごとき月日を送りながらに、自分の勉強をすること幾年であつた結果、学問もだんだん進んで来るし人にもだんだん認められて来たので、いくらか手蔓も出来て、ついに上京して、やはり立志篇の苦辛の日を重ねつつ、大学にも入ることを得るに至つたので、それで同窓中では最年長者——どころでは無い、五ツも六ツも年上であつたのである。蟻が塔を造るような遅々たる行動を生真面目に取つて来たのであるから、浮世の応酬に疲れた皺をもう額に畳んで、心の中にも他の学生にはまだ出来ておらぬ細かい壁積が出来ているのであつた。しかし大学に在る間だけの費用を支えるだけの貯金は、恐ろしい儉約と勤勉とで作り上げていたので、当人は初めて真の学生になり得たような気がして、実に清浄純粹な、いじらしい愉悦と矜持とを抱いて、余念も無しに碩学の講義を聴いたり、豊富な図書館に入ったり、雑事に侵されない朝夕の時間の中に身を置いて十分に勉強することの出来るのを何よりも嬉しむことに思いながら、いわゆる「勉学の佳趣」に浸り得ることを満足に感じていた。そして他の若い無邪気な同窓生から大器晩成先生などという譚名、それは年齢の相違と年寄じみた態度とから与えられた譚名を、臆病臭い微笑でもって甘受しつつ、平然として独自一個の地歩を占めつつ在学した。実際大器晩成先生の在学態度は、その同窓間の無邪気な、言い換えれば低級でかつ無意味な飲食の交際や、活潑な、言い換えれば青年的勇気の漏洩に過ぎぬ運動遊戯の交際に外れることを除けば、何人にも非難さるべきところの無い立派なものであつた。で、自然と同窓生もこの人を仲間はずれにはしながら

も内々は尊敬するようになって、甚だしい茶目吉一二人のほかは、無言の同情を寄せるに吝では無かった。

ところが晩成先生は、多年の勤苦が酬いられて前途の平坦光明が望みせらるるようになった気の弛みのためか、あるいは少し度の過ぎた勉学のためか何か知らぬが気の毒にも不明の病気に襲われた。その頃は世間に神経衰弱という病名が甫めて知られ出した時分であつたのだが、真にいわゆる神経衰弱であつたか、あるいは真に慢性胃病であつたか、とにかく医博士達の診断も朦朧で、人によつて異なる不明の病に襲われてだんだん衰弱した。切詰めた予算だけしか有しておらずであるから、当人は人一倍困悶したが、どうも病気には勝てぬことであるから、しばらく学事を抛擲して心身の保養に力めるがよいとの勧告に従つて、そこで山水清閑の地に活気の充ちた天地の瀨気を吸うべく東京の塵埃を背後にした。

伊豆や相模の歡樂郷兼保養地に遊ぶほどの余裕のある身分では無いから、房総海岸を最初は撰んだが、海岸はどうも騷雜の気味があるので晩成先生の心に染まなかつた。さればとて故郷の平蕪の村落に病軀を持歸るのも厭わしかつたと見えて、野州上州の山地や温泉地に一日二日あるいは三日五日と、それこそ白雲の風に漂い、秋葉の空に飄るがごとくに、ぶらりぶらりとした身の中に、もだもだする心を抱きながら、毛縐子の大洋傘に色の褪せた制服、丈夫一点張りのボックスの靴という扮装で、五里七里歩く日もあれば、また汽車で十里二十里歩く日もある、取止めのない漫遊の旅を続けた。

憫むべし晩成先生、囊中自有錢という身分では無いから、随分切詰めた懐でもつて、物価の高くない地方、贅沢気味の無い宿屋宿屋を渡りあるいて、また機会や因縁があれば、客を愛する豪家や心置無い山寺なぞをも手頼つて、ついに福島県宮城県も出抜けて奥州のある辺僻の山中へ入ってしまった。先生ごく真面目な男なので、俳句なぞは薄生意氣な不良老年の玩物だと思つており、小説稗史などを読むことは罪惡のごとく考へており、徒然草をさえ、余り良いものじや無い、と評したというほどだから、随分退屈な旅だつたろうが、それでもまだしも仕合せな事には少しばかり漢詩を作るので、それを唯一の旅中の樂にして、踽々然として夕陽の山路や曉風の草徑をあるき廻つたのである。

秋は早い奥州のある山間、何でも南部領とかで、大街道とは二日路も三日路も横へ折れ込んだ途方も無い僻村である寺を心ざして、その男は鶴のごとくに瘦せた病軀を運んだ。それは旅中で知合になつた遊歴者、その時分は折節そういう人が有つたもので、律詩の一二章も座上で作ることが出来て、ちよつと米法山水や懷素くさい草書で白ぶすまを汚せる位の

器用さを持ったのを資本に、旅から旅を先生顔で渡りあるく人物に教えられたからである。君はそういう訳で歩いているなら、これこれの処にこういう寺がある。由緒は良くても今は貧乏寺だが、その寺の境内に小さな滝が有って、その滝の水は無類の霊泉である。養老の霊泉は知らぬが、随分響き渡ったもので、二十里三十里をわざわざその滝へかかりに行くものもあり、また滝へ直接にかかれぬものは、寺の傍の民家に頼んでその水を汲んで湯を立てて貰って浴する者もあるが、不思議に長病が治ったり、特に医者に分らぬ正体の不明な病氣などは治るということであつて、語り伝えた現の証拠はいくらでも有る。君の病氣は東京の名医達が遊んでいたら治るといい、君もまた遊び気分でも飛んでも無い田舎などをソノソと歩いて位だから、とてもその事にそこへ遊んで見たまえ。住持といつても木綿の法衣に褌を掛けて芋畑麦畑で肥柄杓を振廻すような氣の置けない奴、それとその弟子の二歳坊主が居るきりだから、日に二十銭か三十銭も出したら寺へ泊めてもくれるだろう。古びて歪んではいるが、座敷なんぞはさすがに悪くないから、そこへ陣取つて、毎日風呂を立てさせて遊んでいたら妙だろう。景色もこれという事は無いが、幽邃でなかなか佳いところだ。という委細の談を聞いて、何となく氣が進んだので、考えて見る段になれば随分頓興で物好きなことだが、わざわざ教えられたその寺を心当に山の中へ入り込んだのである。

路はかなりの大さの溪に沿って上つて行くのであつた。兩岸の山はある時は右が遠ざかったり左が遠ざかったり、またある時は右が迫つて来たり左が迫つて来たり、時に両方が迫つて来て、一水遙に遠く巨巖の下に白泡を立てて沸り流れた。りした。ある場処は路が対岸に移るようになっていたために、危い略約が目の眩くような急流に架つてゐるのを渡つたり、またしばらくして同じようなのを渡り反つたりして進んだ。恐ろしい大きな高い巖が前途に横たわつていて、あのさきへ行くのかしらんと疑われるような覺束ない路を辿つて行くと、辛うじてその岩岨に線のような道が付いていて、是非無くも蟻のごとく蟹のごとくになりながら通り過ぎてはホッと息を吐くことも有つて、何だつてこんな人にも行会わぬいわゆる僻地窮境に來たことかと、いささか後悔する氣味にもならざるを得ないで、薄暗いほどに茂つた大樹の蔭に憩いながら明るく無い心持の沈黙が続いていると、ヒーツ、頭の上から名を知らぬ禽が意味の分らぬ歌を投げ落したりした。

路がようやく緩くなると、対岸は馬鹿馬鹿しく高い巖壁になつてゐるその下を川が流れて、こちらは山が自然に開けて、

の立派さが偲しのばれると同時に今の甲斐無さが明らかに現あらわれているのであった。門を入ると寺内は思おもいのほかに廓落からりと闊ひろくて、松だか杉だか知らぬが恐おそろしい大きな木が有ったのを今より何年か前に斫きつたと見えて、大きな切株の跡の上を、今降りつつある雨がおとずれてそこにそういうものの有ることを見せていた。右手に鐘樓が有って、小高い基礎の周囲には風が吹寄せた木の葉が黄色くまたは赭あかく湿れ色を見せており、中ぐらいな大きな鐘が、ようやく逼る暮色の中に、裾は緑青の吹いた明るさと、竜頭の方は薄暗さの中に入っている一種の物々しさを示して寂寞と懸かつていた。これだけの寺だから屋の棟の高い本堂が見えそうなものだが、それは回縁したのかどうか知らぬが眼に入らなくて、小高い処に庫裡様の建物があった。それを目ざして進むと、ちようど本堂仏殿の在りそうな位置のところに礎石が幾箇ともなく見えて、親切な雨が降る度に訪問するのであろう今もその訪問に接して感謝の嬉し涙を溢あふらせているように、柱の根入りの竅に水を湛たたえているのがよく見えた。境内の変にからりとしている訳もこれで合点が行って、有るべきものが亡うせているのだなと思おもいながら、庫裡へと入った。正面はぴつたりと大きな雨戸が鎖かされていたから、台所口のような処が明あいていたまま入ると、馬鹿にだだ闊い土間で、土間の向う隅には大きな土竈が見え、つい入口近くには土だらけの腐ったような草履が二足ばかり、古い下駄が二三足、特に函の抜けた下駄の二ツがひっくり返かえって腹を出して死んだようにころがっていたのが、晩成先生のわびしい思おもいを誘こそった。

頼む、

と余り大きくは無い声で云ったのだが、がらんとした広土間に響ひびいた。しかしそのために塵一ツ動きもせず、何の音も無く静しずかであった。外にはサアッと雨が降ふっている。

頼む、

と再び呼んだ。声は響ひびいた。答は無ない。サアッと雨が降ふっている。

頼む、

と三たび呼んだ。声は呼んだその人の耳へ反かえって響ひびいた。しかし答はどこからも起おこらなかった。外はただサアッと雨が降ふっている。

頼む。

また呼んだ。例のごとくややしばし音沙汰が無かった。少し焦れ気味になって、また呼ぼうとした時、馳か大鼠かがどこかで動いたような音がした。するとやがて人の気はいがして、左方の上り段の上に閉じられていた間延びのした大きな障子が、がたがたと開かれて、鼠木綿が斑汚れた気付に、白が鼠になった帯をぐるぐるといわゆる坊主巻に巻いた、五分刈では無い五分生えに生えた頭の十八か九の書生のような僮僕のような若僧が出て来た。晩成先生も大分遊歴に慣れて来たので、ここで宿泊謝絶などを食わせられては堪らぬと思うので、ずんずんと来意を要領よく話して、白紙に包んだ多少錢かを押付けるように渡してしまった。若僧はそれでも坊主らしく、

しばらく、

と、しかつめらしく挨拶を保留しておいて奥へ入った。奥は大分深いかして何の音も聞えて来ぬ、シーンとしている。外では雨がサアッと降っている。

土間の中の異った方で音がしたと思うと、若僧は別の口から土間へ下りて、小盥へ水を汲んで持って来た。

マ、とにかくおすすぎをなさってお上りなさいまし。

しめたと思つて晩成先生泥靴を脱ぎ足を洗つて導かるるままに通つた。入口の室は茶の間と見えて大きな炉が切つてある一五六畳の室であつた。そこを通り抜けて、一畳幅に五畳か六畳を長く敷いた入側みたような薄暗い部屋を通つたが、茶の間でもその部屋でも処々で、足踏につれてポコポコと弛んで浮いている根太板のヘンな音がした。

通されたのは十畳位の室で、そこには大きな矮い机を横にしてこちらへ向直つていた四十ばかりの日に焦けて赭い顔の丈夫そうなズク入が、赤や紫の見える可笑しいほど華美ではあるがしかしもう古びかえつた馬鹿に大きくて厚い蒲団の上に、小さな円い眼を出来るだけ睜開してムンズと坐り込んでいた。麦藁帽子を冠らせたら頂上で踊を踊りそうなビリケン頭によく実が入つていて、これも一分刈では無い一分生えの髪に、厚皮らしい赭い地が透いて見えた。そしてその割合に小さくて素敵に堅そうな首を、発達の好い丸々と肥つた豚のような闊い肩の上にシッカリすげ込んだようにして、ヒヨロヒヨロと風の柳のように室へ入り込んだ大器氏に對つて、一刀をピタリと片身青眼に擬けたという工合に手丈夫な

視線を投げかけた。晩成先生いささかたじろいだが、元来正直な君子で仁者敵無しであるから驚くことも無い、平然として坐つて、来意を手短に述べて、それからここを教えてくれた遊歴者の噂をした。和尚はその姓名を聞くと、合点が行つたのかして、急にくつろいだ様子になつて、

アア、あの風吹鳥から聞いておいでなかつたかい。ようござる、いつまでもおいでなさい。何室でも明いている部屋に勝手に陣取らっしゃい、その代り雨は少し漏るかも知れんよ。夜具はいくらもある、綿は堅いがナ。馳走はせん、主客平等と思わっしゃい。藏海、(仮設しおく)風呂は門前の弥平爺にいつけての、明日から毎日立てさせろ。無銭ではわるい、一日に三銭も遣わさるやうに計らえ。疲れてだらう、脚を伸ばして休息せらるやうにしてあげろ。

藏海は障子を開けて庭へ面した縁へ出て導いた。後に跟いて縁側を折曲つて行くと、同じ庭に面して三ツ四ツの装飾も何も無い空室があつて、縁の戸は光線を通ずるためばかりに三寸か四寸位ずつすかしてあるに過ぎぬので、中はもう大に暗かつた。此室がよからうという藏海の言のままその室の前に立つてみると、藏海はそだけ雨戸を繰った。庭の樹々は皆雨に悩んでいた。雨は前にも増して恐ろしい量で降つて、老朽ちてジグザグになつた板廂からは雨水がしどろに流れ落ちる、見ると簷の端に生えている瓦葺が雨にたたかれて、あやまつた、あやまつたというやうに叩頭しているのが見えた。り隠れたりしている。空は雨に鎖されて、たださえ暗いのに、夜はもう逼つて来る。なかなか広い庭の向うの方はもう暗くなつてボンヤリとしている。ただもう雨の音ばかりザアツとして、空虚にちかい晩成先生の心をいっぱいに埋め尽しているが、ふと気が付くとそのザアツという音のほかに、また別にザアツという音が聞えるやうだ。気を留めて聞くとたしかに別の音がある。ハテナ、あの辺かしらんと、その別の音のする方の雨煙濛々たる見当へ首を向けて眼を遣ると、もう心安げになつた藏海がちよつと肩に触つて、

あの音のするのが滝ですよ、あなたが風呂に立てて入ろうとなさる水の落ちる……と云いさして、少し間を置いて、

雨が甚いので今はよく見えませんが、晴れていればこの庭の景色の一ツになつて見えるのです。と云つた。なるほど庭の左の方の隅は山嘴が張り出していて、その樹木の鬱蒼たる中から一条の水が落ちてゐるのらしく

思えた。

夜に入った。茶の間に引かれて、和尚と晩成先生と蔵海とは食事を共にした。なるほどご馳走は無かった。冷たい挽割飯と、大根ツ葉の味噌汁と、塩辛く煮た車輪麩と、何だか正体の分らぬ山草の塩漬の香の物ときりで、膳こそは創だらけにせよ黒塗の宗和膳とかいう奴で、お客あしらひではあるが、箸は黄色な下等の漆ぬりの竹箸で、氣持の悪いものであった。蔵海は世間に接触する機会の少いこのような山中にいる若い者なので、新來の客からなんらかの耳新らしい談を得たいようであるが、和尚は人に求められれば是非無いから吾が有っている者を吝みはしないが、人からは何を求めまいというような態度で、別に雑話を聞きたくも聞かせたくも思っておらぬ風で、食事が済んで後、しばらく三人が茶を喫している際でも、別に会話をはずませるごときのこととはせぬので、晩成先生はただわずかに、この寺が昔時は立派な寺であったこと、寺の庭のずっと先は溪川で、その溪の向うは高い巖壁になっていること、庭の左方も山になっていること、寺及び門前の村家のある辺一帶は一大盆地を為している事位の地勢の概略を聞き得たに過ぎなかったが、蔵海も和尚も、時々風の工合でザアッという大雨の音が聞えると、ちよつと暗い顔をしては眼を見合せるのが心に留まった。

大器氏は定められた室へ引取った。堅い綿の夜具は与えられた。所在無きの身をすぐにその中に横たえて、枕許の洋燈の心を小さくして寝たが、なんとなく寝つきかねた。茶の間の広いところに薄暗い洋燈、何だか銘々の影法師が顧視するような心地のする寂しい室内の雨音の聞える中で寒素な食事を黙々として取った光景が眼に浮んで来て、自分が何だか今までの自分で無い、別の世界の別の自分になったような氣がして、まさかに死んで別の天地に入ったのだとは思われないが、どうも今までに覚えぬ妙な氣がした。しかし、何の、下らないと思ひ返して眠ろうとしたけれども、やはり眠に落ちない。雨は恐ろしく降っている。あたかも太古から尽未来際まで大きな河の流が流れ通しているように雨は降り通している、自分の生涯の中にある日に雨が降っているのでは無くて、常住不斷の雨が降り通している中に自分の短い生涯がちよつと挿まれているものであるように降っている。で、それがまた氣になつて眠れぬ。鼠が騒いでくれたり狗が吠えてくれたりでもしたら嬉しかろうと思うほど、他には何の音も無い。住持も若僧も居ないように静かだ。イヤ全く吾が五官の領する世界には居ないのだ。世界という者は広大なものだとい頃は思っていたが、今はどうだ、世界はただこれ

ザアッ

というものに過ぎないと思ったり、また思い反して、このザアッというのがすなわちこれ世界なのだナと思ったりしている中に、自分の生れた時に初めて挙げたオギャアオギャアの声も他人の四地六つた一声も、それから自分が書を読んだり、他の童子が書を読んだり、唱歌をしたり、嬉しがって笑ったり、怒って怒鳴ったり、キャアキャアガンガンブンブングズグズシクシク、いろいろな事をして騒ぎ廻ったりした一切の音声も、それから馬が鳴き牛が吼え、車ががたつき、汽車が轟き、汽船が浪を蹴開く一切の音声も、板の間へ一本の針が落ちた幽かな音も、皆残らず一緒になってあのザアッという音の中に入っているのだナ、というような気がしたりして、そして静かに諦聴すると分明にその一つのザアッという音にいろいろのそれ等の音が確実に存していることを認めて、アアそうだったかナ、なんぞと思う中に、いつか知らずザアッという音も聞え無くなり、聞く者も性が抜けて、そして眠に落ちた。

俄然として睡眠は破られた。晩成先生は眼を開くと世界は紅い光や黄色い光に充たされていると思つたが、それは自分の薄暗いと思つていたのに相異して、室の中が洋燈も明るくされていれば、またその外に提灯なども吾が枕辺に照らされていて、眠に就いた時と大に異なっていたのが寢惚眼に映ったからの感じであつた事が解つた。が、見れば和尚も若僧も吾が枕辺に居る。何事が起つたのか、その意味は分らなかった。けげんな心持がするので、とみには言葉も出ずに起直つたまま二人を見ると、若僧がまず口をきつた。

おやすみになつているところをお起しして済みませんが、夜前からの雨があの通り甚くなりまして、溪がにわかに膨れてまいりました。ご承知でしょうが奥山の出水は馬鹿に疾いものでして、もう境内にさえ水が見え出して参りました。もちろん水が出たとして大事にはなりませんまいが、ここの溪川の奥入は恐ろしい広い緩傾斜の高原なのです。むかしはそれが密林だったので何事も少かつたのですが、十余年前にことごとく伐採したため禿げた大野になつてしまつて、一ト夕立しても相当に溪川が怒るのでして、既に当時の仏殿は最初の洪水の時、流下して来た巨材の衝突によつて一角が破れたために既に破壊してしまつたのです。その後は上流に巨材などは有りませんから、水は度々出ても大したことも無く、出るのが早い代りに退くのも早く、直に翌日は何の事も無くなるのです。それで昨日からの雨で溪川はもう開きましたが、水

はどの位で止まるか予想は出来ません。しかし私共は慣れてもおりますし、ここを守る身ですから逃げる気もありませんが、あなたには少くとも危険——はありますまいが余計な心配はさせたく有りません。幸なことにはこの庭の左方の高みの、あの小さな滝の落ちる小山の上は絶対に安全地で、そこに当時の隠居所の草庵があります。そこへ今の内に移っていて頂きたいのです。わたくしがすぐにご案内致します、手早くお支度をなすつて頂きます。ト末の方はもはや命令的に、早口に能弁にまくし立てた。その後について和尚は例の小さな円い眼に力を入れて睜開しながら、膝まで水が来るようだと歩けんから、早くお見繕いなすつて。

と追立てるように警告した。大器晩成先生は一トたまりも無く浮腰になつてしまった。

ハイ、ハイ、ご親切に、有難うございます。

ト少しドギマギして、顫えてはいはしまいかと自分でも気が引けるような弱い返辞をしながら、慌てて衣を着けて支度をした。もちろん少し大きな肩から掛ける鞆と、風呂敷包一ツ、蝙蝠傘一本、帽子、それだけなのだからすぐに支度は出来た。若僧は提灯を持って先に立った。この時になつて初めてその服装を見ると、依然としてさっきの鼠の衣だったが、例の土間のところへ来ると、そこには蓑笠が揃えてあつた。若僧はまず自ら尻を高く端折つて蓑をかきいしく手早く着けて、そして大器氏にも手伝つて一ツの蓑を着けさせ、竹の皮笠を被せその紐を緊しく結んでくれた。余り緊しく結ばれたので口を開くことも出来ぬ位で、随分痛かったが、黙つて堪えると、若僧は自分も笠を被つて、

サア、

と先へ立った。提灯の火はガランとした黒い大きな台所に憐れに小さな威光を弱々と振つた。外は真暗で、雨の音は例のごとくザアツとしている。

気をつけてあげろ、ナ。

と和尚は親切だ。高々とズボンを捲り上げて、古草鞋を着けさせられた晩成子は、どこへ行くのだから分らない真暗闇の雨の中を、若僧に随つて出た。外へ出ると驚いた。雨は横振りになっている、風も出ている。川鳴の音だろう、何だか物凄いい不明の音がしている。庭の方へ廻つたようだと思つたが、建物を少し離れると、なるほどもう水が来ている。足の裏が

馬鹿に冷い。親指が没する、踝が没する、脚首が全部没する、ふくら脛あたりまで没すると、もうなかなか溪の方から流れる水の流れ勢が分明にこたえる。空気も大層冷たくなって、夜雨の威がひしひしと身に浸みる。足は恐ろしく冷い。足の裏は痛い。銅ぶるいが出て来て止まらない。何かしらん痛いものに脚の指を突掛けて、危く大器氏は転倒しそうになつて若僧に捉まると、その途端に提灯はガクリと揺めき動いて、蓑の毛に流れている雨の滴の光りをキラリと照らし出したかと思つと、雨が入ったか滴がかかったかであらう、チュツと云つて消えてしまった。風の音、雨の音、川鳴の音、樹木の音、ただもう天地はザーッと、黒漆のように黒い闇の中に音を立てているばかりだ。晩成先生は泣きたくなつた。

ようございます。今更帰れもせず、提灯を点火することも出来ませんから、どうせ差しているのでは無いその蝙蝠傘を出しなさい。そうそう。わたくしがこちらを持つ、あなたはそちらを握つて、決して離してはいけませんよ。闇でもわたしは行けるから、恐れることはありません。ト蔵海先生実に頼もしい。平常は一ト通りの意地が無くもない晩成先生も、ここに至つて他力宗になつてしまつて、ただもう世界に力とするものは蝙蝠傘一本、その蝙蝠傘のこつちは自分が握つてゐるが、むこうは真の親切者が握つてゐるのだか狐狸が握つてゐるのだか、妖怪変化、悪魔の類が握つてゐるのだか、何だかだかサッパリ分らない黒闇々の中を、とにかく後生大事にそれに縋つて随つて歩いた。

水はだんだん足に触れなくなつて来た。爪先上りになつて来たようだ。やがてだんだん勾配が急になつて来た。坂道にかかったことは明らかに成つて来た。雨の中にも滝の音は耳近く聞えた。

もうここを上りさえすれば好いのです。細い路ですからね、わたくしも路で無いところへ踏込むかも知れませんが、転びさえしなければ草や樹で擦りむく位ですから驚くことは有りません。ころんではいけませんよ、そろそろ歩いてあげますからね。

ハハイ、有り難う。

ト全く顫え声だ。どうしてなかなか足が前へ出るものでは無い。

こうなると人間の眼の有つたのは全く余り有り難くありませんね、盲目の方がよほど重宝です、アッハハハハ。わたくしも大分小さな樹の枝で擦剥き疵をこしらえましたよ。アッハハハハ。

ト藏海め、さすがに仏の飯で三度の埒を明けて来た奴だけに大禪師らしいことを云ったが、晩成先生はただもうビクビクワナワナで、批評の余地などは、よほど喉元過ぎて怖いことが糞になった時分までは有り得はしなかった。

路は一トしきり大に急になりかつまた窄くなったので、胸を突くような感じがして、晩成先生はついに左の手こそ傘をつかまえているが、右の手は痛むのも汚れるのも厭ってなどいられないから、一步一步に地面を探るようになって、まるで四足獣が三足で歩くような体になって歩いた。随分長い時間を歩いたような気がしたが、苦勞には時間を長く感じるものだから実際はさほどでも無かつたろう。しかし一町余は上ったに違いない。ようやくだらだら坂になって、上りきつたナと思うと、

サア来ました。

ト藏海が云った。そして途端に持っていた蝙蝠傘の一端を放した。で、大器氏は全く不知案内の暗中の孤立者になったから、黙念として石の地蔵のように身じろぎもしないで、雨に打たれながらポカンと立っていて、次の脈搏、次の脈搏を数えるがごとき心持になりつつ、次の脈が搏つ時に展開し来る事情をば全くアテも無く待つのであった。

若僧はそこらに何かしているのだらう、しばらくは消息も絶えたが、やがてガタガタいう音をさせた。雨戸を開けたに相違無い。それから少し経て、チッチッという音がすると、パッと火が現われて、後は一ツの建物の中の土間に踞つていて、マツチを擦って提灯の蠟燭に火を点じようとしているのであった。四五本のマツチを無駄にして、やっと火は点いた。荊棘か山椒の樹のようなもので引爬いたのであらう、雨にぬれた頬から血が出て、それが散っている、そこへ蠟燭の光の映ったさまは甚だ不気味だった。ようやくそこへ歩み寄った晩成先生は、

怪我をしましたね、お気の毒でした。

と云うと、若僧は手拭を出して、ここでしょう、と云いながら顔を拭いた。蚯蚓脹れの少し大きい位で、大した事では無かつた。

急いでいるからであらう、若僧はすぐにその手拭で泥足をあらましに拭いて、提灯を持ったまま、ずんずんと上り込んだ。四畳半の茶の間には一尺二寸位の小炉が切つてあつて、竹の自在鍵の煤びたのに小さな茶釜が黒光りして懸っている。

のが見えたかと思うと、若僧は身を屈して敬虔の態度にはなつたが、すぐと区割になつてゐる襖を明けてその次の室へ、云わば闖入せんとした。土間からオズオズ覗いて見ている大器氏の眼には、六畳敷位の部屋に厚い座蒲団を敷いて死せるがごとく枯坐していた老僧が見えた。着色の塑像のごとくで、生きてゐるものとも思えぬ位であつた。銀のような髪が五分ばかり生えて、細長い輪郭の正しい顔の七十位の痩せ枯びた人ではあつたが、突然の闖入に対して身じろぎもせず、少しも驚く様子も無く落つき払つた態度で、あたかも今まで起きてでもいた者のようであつた。特に晩成先生の驚いたのは、藏海がその老人に対して何も云わぬことであつた。そしてその老僧の坐辺の洋燈を点火すると、藏海は立返つて大器氏を上へ引ずり上げようとした。大器氏は慌てて足を拭つて上ると、老僧はジーツと細い眼を据えてその顔を見詰めた。晩成先生は急に挨拶の言葉も出ずに、何か知らず叮嚀に叩頭をさせられてしまつた。そして頭を挙げた時には、藏海はしきりに手を動かして麓の方の闇を指したり何かしてゐた。老僧は點頭していたが、一語をも発しない。

藏海はいろいろに指を動かした。真言宗の坊主の印を結ぶのを極めて疾くするようなので、晩成先生は呆氣に取られて眼ばかりパチクリさせていた。老僧は極めて徐かに軽く點頭いた。すると藏海は晩成先生に對つて、

このかたは耳が全く聞えません。しかし慈悲の深い方ですからご安心なさい。ではわたくしは帰りますから。

ト云つておいて、初の無遠慮な態度とはスツカリ違つて叮嚀に老僧に一礼した。老僧は軽く點頭いた。大器氏はちよつと会釈するや否や、若僧は落付いた、しかしテキパキした態度で、かの提灯を持つて土間へ下り、蓑笠するや否やたちまち戸外へ出て、物静かに戸を引寄せ、そして飛ぶごとくに行つてしまつた。

大器氏は実に稀有な思いがした。この老僧は起きていたのか眠つていたのか、夜中真黒な中に坐禅ということをしていたのか、坐りながら眠つていたのか、眠りながら坐つていたのか、今夜だけ偶然にこういう態であつたのか、始終このか、と怪み惑うた。もとより眞の己達の境界には死生の間にすら関所が無くなつてゐる、まして覺めてゐるということも睡つてゐるということも無い、坐つてゐるということと起きてゐるということとは一枚になつてゐるので、比丘たる者は決して無記の睡に落ちるべきでは無いこと、仏説離睡經に説いてある通りだということも知つていなかった。またいくらか近い頃の人にも、死の時のほかには脇を下に着け身を横たえて臥さぬ人の有ることをも知らなかつたのだから、吃驚

したのは無理でも無かった。

老僧は晩成先生が何を思つていようと一切無関心であつた。

□□さん、サア洋燈を持つてあちらへ行つて勝手に休まつしやい。押入の中に何か有ろうから引出して纏いなさい、まだ三時過ぎ位のものであらうから。

ト老僧は奥を指さして極めて物静に優しく云つてくれた。大器氏は自然に叩頭をさせられて、その言葉通りになるよりほかは無かつた。洋燈を手にしてオズオズ立上つた。あとはまた真黒闇になるのだが、そんな事をとかく云うことはかえつて余計な失礼の事のように思えたので、そのままに坐を立て、襖を明けて奥へ入つた。やはりそこは六畳敷位の狭さであつた。間の襖を締切つて、そこに在つた小さな机の上に洋燈を置き、同じくそこに在つた小坐蒲団の上に身を置くと初めて安堵して我に返つたような気がした。同時に寒さが甚く身に染みて胴顚がした。そして何だかがっかりしたが、ようやく落つて来ると、□□さんと自分の苗字を云われたのが甚く気になった。若僧も告げなければ自分も名乗らなかつたのであるのに、殊に全くの驥になつてゐるらしいのに、どうして知つていたろうと思つたからである。しかしそれは藏海が指頭で語り聞かせたからであらうと解釈して、まず解釈は済ませてしまつた。寝ようか、このままに老僧の真似をして暁に達してしまおうかと、何か有ろうと云つてくれた押入らしいものを見ながらちよつと考えたが、気がついて時計を出して見た。時計の針は三時少し過ぎであることを示してゐた。三時少し過ぎでゐるから、三時少し過ぎでゐるのだ。驚くことは何も無いのだが、大器氏はまた驚いた。そして何だか知らずにハッと思つた。すると戸外の雨の音はザアッと続いてゐた。時計の音はたちまち消えた。眼が見ている秒針の動きは止まりはしなかつた、確実な歩調で動いてゐた。

何となく妙な心持になつて頭を動かして室内を見廻わした。洋燈の光がボーッと上を照らしてゐるところに、煤びた額が掛つてゐるのが眼に入つた。間拔な字体で何の語かが書いてある。一字ずつ心を留めて読んで見ると、

橋流水不流

とあった。橋流れて水流れず、橋流れて水流れず、ハテナ、橋流れて水流れず、と口の中で扱い、胸の中で咬んでいると、たちまち昼間渡った飯沼の橋が洶々と流れる溪川の上に架渡されていた景色が眼に浮んだ。水はどうどうと流れる、橋は心細く架渡されている。橋流れて水流れず。サテ何だか解らない。シーンと考え込んでいると、たちまち誰だか知らないが、途方も無い大きな声で

橋流れて水流れず

と自分の耳の側で怒鳴りつけた奴が有って、ガーンとなった。

フト大器氏は自ら嘲った。ナンダこんな事、とかくこんな変な文句が額なんぞには書いてあるものだ、と放下してしまつて、またそこらを見ると、床の間では無い、一方の七八尺ばかりの広い壁になつてゐるところに、その壁をいくらかも余さない位な大きな古びた画の軸がピタリと懸つてゐる。何だか細かい線で描いてある横物で、打見たところモヤモヤと煙つてゐるようなばかりだ。紅や緑や青や種々の彩色が使つてあるようだが、図が何だとはサツパリ読めない。多分有り勝な涅槃像か何かだろうと思つた。が、看るとも無しに薄い洋燈の光に朦朧としてゐるその画面に眼を遣つてゐると、何だか非常に綿密に楼閣だの民家だの樹だの水だの遠山だの人物だのが描いてあるようなので、とうとう立上つて近くへ行つて観た。するとこれは古くなつて処々汚れたり損じたりはしてはゐるが、なかなか叮嚀に描かれたもので、巧拙は分らぬけれども、かつて仇十州の画だとか教えられて見たことのあるものに肖た画風で、何だか知らぬが大層な骨折から出来てゐるものであることは一目に明らかであつた。そこでことさらに洋燈を取つて左の手にしてその図を近々と臨んで、洋燈を動かしては光りの強いところを観ようとする部分部分に移しながら見た。そうしなければ極めて繊細な画が古び煤けてゐるのだから、ややもすれば見て取ることが出来なかつたのである。

画は美わしい大江に臨んだ富麗の都の一部を描いたものであつた。図の上半部を成してゐる江の後方には翠色悦ぶべき遠山が見えてゐる、その手前には丘陵が起伏してゐる、その間に層塔もあれば高閣もあり、黒ずんだ鬱樹が蔽うた岨もあれば、明るい花に埋められた谷もあつて、それからずっと岸の方は平らに開けて、酒樓の綺麗なものも幾戸もあり、士女老幼、騎馬の人、閑歩の人、生計にいそしんでいる負販の人、種々雑多の人々が蟻ほどに小さく見えてゐる。筆はただ心持で動

いているだけで、もちろんその委曲が画けている訳では無いが、それでもおのずからに各人の姿態や心情が想い知られる。酒樓の下には画舫もある、舫中の人などは胡麻半粒ほどであるが、やはり様子が分明に見える。大江の上には帆走っているやや大きい船もあれば、篠の葉形の漁舟もあって、漁人の釣しているらしい様子も分る。光を移してこちらの岸を見ると、こちらの右の方には大きな宮殿様の建物があって、玉樹琪花とでも云いたい美しい樹や花が点綴してあり、殿下の庭様のところには朱欄曲々と地を劃して、欄中には奇石もあれば立派な園花もあり、人の愛観を待つまざまの美しい禽なども居る。だんだんと左へ燈火を移すと、大中小それぞれの民家があり、老人や若いものや、蔬菜を荷っているものもあれば、蓋を張らせて威張って馬に騎っている官人のようなものもあり、跣足で柳条に魚の鰓を穿った奴をぶらさげて川から上つて来たらしい漁夫もあり、柳がところどころに翠烟を罩めている美しい道路を、士農工商樵魚、あらゆる階級の人々が右往左往している。綺錦の人もあれば檻樓の人もある、冠りものをしているものもあれば露頂のものもある。これは面白い、春江の景色に併せて描いた風俗画だナと思つて、まただんだんに燈を移して左の方へ行くと、江岸がなだらになつて川柳が扶疎としており、雜樹がもさもさとなつているその末には蘆荻が茂っている。柳の枝や蘆荻の中には風が柔らかに吹いている。蘆のきれ日には春の水が光っていて、そこに一艘の小舟が揺れながら浮いている。船は簾簾を編んで日除兼雨除というようなものを胴の間にしつらつてある。何やら火炉だの槃磔だのの家具も少し見えている。船頭の老夫は艫の方に立上つて、戕舸に片手をかけて今や舟を出そうとしていながら、片手を挙げて、乗らないか乗らないかと云つて人を呼んでいる。その顔がハッキリ分らないから、大器氏は燈火をだんだんと近づけた。遠いところからだんだんと歩み近づいて行くとだんだんと人顔が分つて来るように、朦朧たる船頭の顔はだんだんと分つて来た。膝ッ節も肘もムキ出しになつてゐる絆纏みたようなものを着て、ごくごく小さな笠を冠つて、やや仰いでゐる様子は何とも云えない無邪気なもので、寒山か拾得の叔父さんにでも当る者に無学文盲のこの男があつたのではあるまいかと思われた。オーイッと呼わつて船頭さんは大きな口をあいた。晩成先生は莞爾とした。今行くよーッと思わず返辞をしようとした。途端に隙間を漏つて吹込んで来た冷たい風に燈火はゆらめいた。船も船頭も遠くから近くへ飄として来たが、また近くから遠くへ飄として去つた。ただこれ一瞬の事で前後は無かつた。

屋外は雨の音、ザアツ。

大器晩成先生はこれだけの談を親しい友人に告げた。病氣はすべて治った。が、再び学窓にその人は見られなかった。山間水涯に姓名を埋めて、平凡人となり了するつもりに料簡をつけたのであろう。ある人は某地にその人が日に焦けきつたただの農夫となつてゐるのを見たということであつた。大器不成なのか、大器既成なのか、そんな事は先生の問題では無くなつたのであろう。(大正十四年七月)

① 自負。

② 学問が深くて広い人。

③ 草の生い茂る野原。

④ 下野(栃木県)と上野(群馬県)。

⑤ 民間の歴史的読み物。

⑥ ひとりで行くさま。

⑦ 中国北宋の米芾とその子米友仁の創めた山水画。

⑧ 唐の書家(七五八八五)。草書の大家。

⑨ 物静かで奥深いさま。

⑩ 山のみね。

⑪ 火事で焼けること。

⑫ めしつかい。しもべ。

⑬ 僧のことを嘲つていうことば。

⑭ とがった頭。

⑮ 山のはし。

⑯ 他と区別がはつきりつくこと。

⑰ 約一一〇メートル。

⑰ 約一一〇メートル。

⑱ 炉やかまどの上に鍋などをかけるために上からつるし、自在に上下させるかぎ。

⑲ 悟りの道を極めた境界。

⑳ 修行僧。

㉑ 仇英。中国明代中期の画家。

㉒ 美しく飾つた遊覧船。

㉓ 朱塗りの欄干。

㉔ 柳の木の枝。

㉕ 綾や錦の美しい着物。

㉖ ぼろきれ。

㉗ 枝葉の繁茂するさま。

㉘ 大皿、小皿。

㉙ 船尾。

㉚ 舟をつなぐくい。

㉛ 共に唐代の僧。天台由に住み、奇行多く、それぞれ文殊菩薩、普賢菩薩の化身と称せられる。画題として好まれ、飘逸な姿に描かれた。

㉜ につこりと。

達意といふこと

しかし文章の最も基本的な機能は伝達である。筆者の言はんとする内容をはつきりと読者に伝へて誤解の余地がないこと、あるいは極めてすくなくないことが、文章には要求される。何よりもさきに要求される。扉に小さく書いてある「押」とか「引」とかいふ文字（あれはおそらく「押せ」「引け」とめいめい仮名を送つて読んでくれといふ気持なのだ）からはじまり、つひには、「いづれの御時にか、女御更衣あまた侍ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり」（言ふまでもなく『源氏物語』の冒頭）や、「木曾路はすべて山の中である」（これも言ふまでもなく島崎藤村『夜明け前』の冒頭）に至るまで、一般に文章はこの条件をみたしてゐるゆゑに文章として成立する。をかしな言ひ方だが、この島崎藤村の一文がもし「山の中はすべて木曾路である」であつたなら、論理が濁つて筋が通らなくなり、意味が伝はらないため、たちまち文章としての資格を失ふのである。

もちろんこんなことはいまさら念を押すまでもない判り切つた話だ。一体わたしのこの本は、判り切つたことばかりを、ただし多少の新味を添へるのを藝の見せどころにして書くしかない、妙な性格の本なのだが、しかしそれにしても度が過ぎる、何もそんな大前提までさかのぼる必要はなからう、と呆れる人も多いかもしれない。だが、文章でいちばん大事なものはこのことだから、わたしは野暮を承知で敢へて言はなければならぬ。もしこの伝達といふ条件にかなひさへすれば、たとへ冗長だらうと、同じ言葉が何度も出て来て見苦しからうと、それで一応のところまあ通用するのである——名文とは決して言へないにしても。逆に、どんなに美辞麗句を並べ立て、歯切れがよくても、伝達の機能をおろそかにしてゐる文章は名文ではない。駄文である。いや、文章としての最低の資格が怪しいのだから、駄文ですらないと言ふのが正しいだらう。

このへんの事情を手つ取り早く示してくれる二つの文書が、われわれのそばに転がつてゐる。昭和二十一年の憲法と明治二十二年の憲法である。世には文章の何たるかを知らない者があつらしく、現行憲法を悪文としてしりぞけ、それに

ひきかへ明治憲法は大した名文だ、すごいすごい、などと褒めそやしていつぱし文学的なつもりであるけれど、わたしに言はせればふざけちゃいけない。たしかに現行憲法は名文ではないが、しかしあれだつて明治憲法にくらべれば文章として遙かに優れてゐるのである。それは筆者の言はんとするところを表現してずいぶん明確であり、曖昧さが乏しい。誤解の余地がすくない。この明晰といふ性格が文章一般の根本条件であることはすでに述べたとほりだが、法律の文章となればなおさらだらう。法律がどうとも取れるあやふやな口のきき方をしたのでは、あぶなつかしくて仕方がないのだ。そしてその曖昧なものの言ひ方の大將格が明治憲法で、これは明晰などきれいさつぱり度外視した劣弱な文章で書れてゐる。あんなものを名文呼ばはりする者は、土台、文章を云々する柄ではないのだ。

と記すとき、わたしは言ふまでもなく現行憲法の文章を一から十までよしとする者ではない。たとへば前文などよく言はれるとほり下手な翻訳調で、どうにも気色が悪いことはわたしもまたかねがね痛感してゐる。何しろその最初の文、

日本國民は、正當に選舉された國會における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸國民との協和による成果と、わが國全土にわたつて自由のもたらす恵澤を確保し、政府の行爲によつて再び戦争の慘禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主權が國民に存することを宣言し、この憲法を確定する。

は、小嶋和司の試みたやうに、

日本國民は（主語）、正當に選舉された國會における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸國民との協和による成果と（動機一）、

わが國全土にわたつて自由のもたらす恵澤（動機二）を確保し、

政府の行爲によつて再び戦争の慘禍が起ることのないやうにする（動機三）ことを決意し、ここに主權が國民に存することを宣言し、この憲法を確定する（述語）。

と図式化してやうやく意味が呑込めるのである。それはどう見ても褒めるわけにはゆかない文章だらう。しかしここで大事なのは、小嶋が直したやうにすればたしかに腑に落ちるし、しかもこれ以外の解釈はどうやら成立しきうもないといふことである。その程度にはなんとかうまい具合に語彙を選び、概念が濁らぬやう、それを並べてあるのだ。これは憲法前文がまあそれなりに伝達性・論理性を持つてゐることの証拠にほかならない。すなはち、感心しない文章であることは同意してもいいし、同意するしかないけれど、同時に、いちおう論理的でありいちおう伝達の機能を備えてゐることもまた認めなければ片手落ちになるだらう。それは文章の最低の条件にからうじてかなつてゐるのである。そして明治憲法の場合、現行憲法の前文に当るものが告文や発布勅諭であると見立てて差支へないならば、その告文や勅諭が莊嚴にしてチンプンカンブン、勿体ぶつてゐて曖昧模糊、何を言つてゐるのやらさつぱり見当もつかないことは、わざわざここに引用するまでもない。すなはちそれは虚飾に身をやつしながら、しかし文章基本の機能をあつさり忘れ果ててゐる。さながら数年風呂にはいるのを怠つて白粉を塗りたくつてゐるやうなもので、醜悪きはまらない。かうなれば現行憲法前文のほうの数等ましなことは言ふまでもなからう。それはすくなくともきたま風呂にはいつて、しかしかはいさうに紅白粉には手が届かない様子なのである。

前文以外にも、現行憲法にはをかした言葉づかひがときどき見受けられる。たとへば第一条の、「天皇は、日本國の象徴であり日本國民統合の象徴であつて、この地位は、主權の存する日本國民の總意に基く」における「象徴」のごとき。国旗(日の丸)や国歌(君が代)や国花(桜)のやうな具體的なものが日本の象徴だといふのなら話はすらりと通るが、一個人が國を象徴するといふのは理屈にささか無理がある。しかしこれは修辭學のいはゆる婉曲法で、「もはや天皇が伝統的な意味での君主でも元首でもないこと」、および「日本の國家形体は立憲君主制と共和制の中間形態ともいふべき独特な (E. generis) ものだ」といふこと (いづれも小林直樹、傍点も小林) を表現してゐると取れば、それなりに文意は明らかである。たとへ誤解の余地はあつても、極めて僅かであらう。

また第十九条、「思想及び良心の自由は、これを侵してはならない」における「良心の自由」はどういふ内容を指すの

か、あまり明確ではない。「思想の自由」のほうはもちろんよく判る。そして「良心」も「自由」も判る。しかし「良心」(『大言海』によれば「物事ノ是非善惡ノ判別ヲ、己レガ利害ノ外ニ、正シクサバク天賦ノ心」と「自由」とをかういふ形で結びつけられると、まとまつた概念を構成しにくい。その「天賦ノ心」ならもともと侵されることはあり得ない自由なものに決っているではないか——何しろ「己レガ利害」によつてさえ拘束されないのだから。ここでついに素人考へを記しておけば、これはおそらく英語の“conscience”を直訳、といふよりもむしろ誤訳したせいでの舌つ足らずな言ひまはしであつた。この語について『オックスフォード英語辞典』は“consciousness of right and wrong; moral sense”と言ふ。従つてここは「倫理意識の自由」ないし「道徳感の自由」とすれば正しかつたのである。それは、われわれの国家において、儒教的国家やヘーゲル哲学的国家の場合と違つて、倫理と風俗の問題は個々人にゆだねる、国は干渉しない(たとへば教育勅語のやうなものは許されない)、といふことの表明だつたのだらう。かつての国家は国民を倫理的に指導することをもつてその至高の機能としたけれども、眞の近代国家ないし民主主義国家になると、国家がそのようなことをなし得るといふのは過去の支配者たちと哲学者たちの他愛もない夢想だと判断し、修身の先生の役をきれいさつぱりと諦め、もつぱら事務的な管理者としての立場にみづから置くことになつた。それが今日の国家概念にほかならない。しかし現行憲法の起草者たち、あるいはむしろ翻訳者たちは、英語力の不足と日本語の語感の鈍磨もさることながら、昭和二十年代初頭では無理もない話だけれど何よりもまづ儒教的国家像やヘーゲル哲学的国家像に強く縛られてゐたため、すなはち民主主義的国家像に疎かつたため、このへんの事情を充分にとらへることができなかったのである。

さらに第六十六条第二項、「内閣総理大臣その他の國務大臣は、文民でなければならぬ」の「文民」もまた判りにくい。おそらく武官ないし職業軍人でないものといふことだらうが、同じ婉曲法にしても第一条の「象徴」よりも格段に劣る。第一に、「象徴」ならば久しい以前からある言葉ゆゑ何とか類推がきくの、これはまつたくの新語で手がかりが乏しいからである。第二に、第九条の戦争放棄と戦力の否定により、当然、武官ないし職業軍人はこの国に存在しないはずなのに、それをわざわざかう述べることは第九条と衝突し、つまり論理的明晰さをいつそう失ふことになるからである。

といふやうに現行憲法の文章論的(政治論的ではない)欠点はすくなしとしない。ここでは個々の言葉の選び方に主眼

を置いて述べたけれど、運動神経のない優等生が厚着したようなモタモタ口調のことまで論じ出したら、いつまでたつても切りがないだらう。それはたしかにわれわれを苛立たせる。それは何か、濡れ雑巾で顔をさかなでされたやうな感触と与へる。せめて例の「これを」という口癖（たとへば第十条、「日本國民たる要件は、法律でこれを定める」）だけでも除いたら気がせいせいするのになんて、つい愚痴をこぼしたくなるのはわたし一人ではなからう。が、それにもかかはらず現行憲法の文章は、明治憲法にくらべてずつと上等的である。曲りなりにも伝達という役目を果してゐるからだ——ちようどさんさん道草を喰つてもとにかく伝言を伝へる使ひの者のやうに。われわれはその無器用でしかも律義な態度を評價しなければならぬ。

明治憲法の文章が粗悪なことは、第一条、「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」によつても明らかである。まづ「大日本帝國」といふ名の方が威張りくさつてゐて、愚劣で、趣味が悪い。これは植木枝盛の二つの憲法私案の、「日本國」といふ呼称が品がいいし、そこまではゆかなくとも、伊藤博文が井上毅らの協力を得て作つたいはゆる夏島草案の「日本帝國」のほうが無難だらう。次に「萬世一系ノ天皇」がかしい。これは過去に關しては虚偽で、さらに未来に關しては何の根拠もないあやふやな話だからである。真赤な嘘をつくのが恥しらずな振舞ひであり、予見不可能なことを断言するのが滑稽なことは言ふまでもない。そして、恥しらずで滑稽、醜怪で笑止千万な文章が讀者にまともに受入れられるはずはないのである。それに感嘆することができるのはただ後世の無学で下等なアンボンタンだけであらう。草稿の段階においてドイツ人口エスレルは、過去に属するほうのことはさすがに遠慮していちおう認めるやうなふりをしたもの、未来に属するほうのことはいくら何でも注意しておかなければならないと覺悟を決めたのだらう、ハノーヴァ王朝の例を引いてこの「過大ノ誇稱」をきびしく戒めた。同王朝はその八百年祭と九百年祭を祝ふ勅語のなかで、わが王室は天地と共に窮ることなくこの國を統治すると宣言したのに、九百年祭のち数年にして國土はプロシアに合併され、國王は王冠を失つたといふのだ。すなはち、「唯々漠然タル文字ヲ憲法ノ首條ニ置キ以テ天下ノ論難ヲ招クハ萬々得策ニアラサルヲ忠告セント欲ス」（稲田正次『明治憲法成立史』からの孫引き）。

しかしわたしが明治憲法第一条最大の弱点とするのは、「大日本帝國」でもなければ、「萬世一系」でもなく、「天皇之ヲ

「統治ス」である。この「統治」といふ概念は「不分明なことこの上ない。縦から見ても横から見てもさつぱりわけが判らないのである。それはイギリスふうの單なる君臨（すれども統治せず）を暗に指してゐるのか、それとも天皇親裁を主張してゐるのか、はたまたその中間のへんをぼんやりと言つてゐるのか、いつこうさだかでない。それは曖昧至極、どうにでも伸び縮みがきくチューインガム条項なのだ。もちろんわたしが理解できないだけなら大したことはない、あの小説家は法律に暗く頭が悪いと言つて笑へばそれですむ。ちよいとした酒の肴にはなるかもしれない。しかし残念ながら、近代日本がこの条文の解釈に關してつひに合意に達しなかつたことはすでに歴史に明らかなのである。近代日本史の悲劇はおほむねこの朦朧たる一文に由来する。あるいは、憲法の冒頭にこのやうな駄文を置かざるを得なかつたことに集約される。主としてこの「統治」の概念が曖昧なため、明治政權は昭和二十年八月に至つて瓦解したと言つても過言ではなからう。すなはちこのチューインガム条項は、何のことはない亡国の文章の見本にほかならない。「文章は經國の大業、不朽の盛事」といふ古来の教へに背くこと、これよりはなはだしきはないと言ふべきだらう。その亡国の文章が名文だなんてホイホイ騒ぐのはただ近頃の無學で下等なアンポンタン……、いや、これはさつき言つたことだ、何ももう一ぺんくりかへす必要はない。

が、面妖なのは第一条だけではない。第二条、「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」もまた奇怪である。天皇の何を侵してならないのか明記してないからだ。そこで調べてみると、夏島草案の第五条（そして十月草案の第四条）には、「天皇ノ身體ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」とあつて、これならいちおう判らぬでもない。果して天皇の肉体が神聖かどうかはともかく、一般に人間の体に害を加へてならないことは当然だからである——あまりにも当然すぎて記す必要があるとも思へないくらゐに。しかしこの文章は、井上毅の再度にわたる反対によつて改められることになつた。以下、主として稲田正次の本によつて略述すれば、井上はまづ夏島草案の際には、「神聖」は道德上の語であつて法律語ではないし、「侵スヘカラス」は「inviolable」の適切な訳語ではない（と述べるところを見ると英語の草案もあつたのか。ちなみにこの箇所は口エスレルの草案では「unverletzlich」）、と主張したのである。彼の代案は、妥當な訳語を探すといふ「修辭家ノ困難ナル事業」を避け、むしろこの趣旨を勅語のほうにゆだね、憲法にははぶくといふ手であつたが、これはしりぞけられる。

そこで井上は十月草案の検討に際し、今度は大幅に譲歩し、「至尊ニ對シテハ敢テ逼迫ノ言詞ヲ用ヰザル」わが国の風習を言ひ立てて、「ノ身體」の三字削除を迫つたのである。ところで、以下は稲田の説ではなく、わたし一箇の感想にすぎないけれど、井上がこれだけこの条文にこだはり、しかも僅か一年にして正反對の方向に意見を改めたことは、まことに異様な話と言はなければならない。それは明治史の謎としていつまでも残るものではなからうか。わたしの推測を言へば、彼ははじめいかにも西洋通の開明官僚にふさはしく、古代的・神權政治的君主制を指し示すこのくだりを嫌つたのだらう。彼の念頭にあつたのはもうすこし新しい型の国家だつたのである。しかしその主張が一顧だにされなかつたとき、井上はいはば自説の面目を守るため、露骨に天皇の肉体を云々することの西洋くさを責めたのではないか。いや、かうも考えられる。ひよつとすると井上は、憲法からこの条項を削ることを主張したせいで、天皇に対する忠誠を疑はれる羽目になつたのではないか。そこで彼は身を守るため、保守派よりもいつそう保守的な立場を装つたのではないか。いづれにしても彼の心事は奇怪だが、しかし明治中期においてはこれはごくありふれたことだつたかもしれない。いくら西洋通とは言つても、彼の内面は知的で近代的な官僚と尊皇趣味の儒者との二つに引き裂かれてゐた、と推定されるからである。すなはち時代が彼にかういふ削除をさせ、かういふ文章を書かせることになつたわけだ。わたしはそのことをいささか憐れまないでもない。もし何なら一しづくの涙をそいでもよい。しかしこの三字削除のせいで、凡庸な駄文がたちまち兇惡な呪文と変じ、長く禍根を残すことになつたといふことははつきりと認めなければならない。明治憲法第三条は、きはめて簡略であるがゆゑにその提示する意味はきはめて朦朧としてゐる、しかもその斷乎たる口調のせいで読者めいめいの勝手な意味付与が唯一至上のものだと思ひ込ませる、この上なく危険な文章であつた——もしこのやうなものを文章と呼ぶことができるならば。といふのは、もともと文章における簡潔とは、伝へるべき内容をはつきりと表現しながらただし冗漫に陥らないことへの賞讃であつて、いくら簡略でも意を達しないのでは、エヘンとかヤットウとかいふ声と同じ、いや、それにも劣るからである。

「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」が、君臨すれども統治せずを暗々裡にほのめかす、すなはち明治憲法のなかで最も密教的な部分だといふ説がある。わたしはこの説に一概に反対しようとは思はない。伊藤博文の『憲法義解』この条の注解

に、「君主は」指斥言議の外に在る者と」と記されてゐるのは、たしかに、そういう氣持かもしれないと感じられるのだ。ただし、それなら第一条との関係は一体どうなるのか、さつぱり納得がゆかないけれど。そもそもかういふ粗雑な言葉づかひによつて、君臨すれども統治せずといふ複雑な内容を述べようとするのは、どう見ても無理な話である。それはもはや文章家の態度ではなく、暗号作成者の態度だらう。つまり暗号コードの持主にしか解読できないからだ。しかも不幸なことにもその暗号コードは、『憲法義解』によつてすら充分には与へられず（ごく謎めいたかたちでしか与へられず）、もちろん憲法の他の条項によつても提供されてゐないのである。そしていつそう悪いことにこの暗号は、表面は決して暗号ではなく、文章らしいものになつてゐた。暗号の趣旨（しかしそれがどのやうなものかはつひに誰にも判らない）とどうやらまつたく対立するらしいことを述べてゐる、いちおう文章みたいな体裁のものになつてゐた。これでは誤解が雲のやうに生ずるのは必然のことである。いや、果してそれは誤解であつたか、これも結局のところ明らかでないけれど。

とにかくこの断乎として何かを言ひ、しかし何を言つてゐるのか客観的にはつひに判らない文章は、国政をみだす密呪として作用した。それは第一条の「統治」の概念を顕教的に（すなはち天皇親裁的に）把握する立場の心理的支へととなつた。それは国家法人説（つまり天皇機関説）を打倒するのに役立つた。それは緊急勅令の濫発を隠微なところで保證し、議會がそれを否決することをいはば国会議員の意識の底ですこぶる困難にした。そしてまた、第十一条、「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」、第十二条、「天皇ハ陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ム」の解釈に陰に陽に影響を与へ、統帥権干犯といふ、軍部が政府を攻撃する際の常套語を案出させ、それを有効にした。（この語は『憲法義解』の第三条の注解、「天皇は」欽仰すべく干犯すべからず」に示唆を得て作られたと推定される。）さらにこの文章がその悪文性と呪術性のゆゑに、一國の精神をどれほど暗鬱にし、沈滞させたかは、いまさら記すまでもない。すなはちこの第三条もまた亡國の駄文であつた。それは、威勢がいいだけで内容は貧弱、といふよりもむしろ空無であつたゆゑに、すなはち伝達の文章ではなく恫喝の叫びであつたゆゑに、文章の本義に反してゐるのである。このやうな、文章としての致命的な欠陥は、何も第一条と第二条だけに限らず、明治憲法のかかなりの条文について言へるだらう。

しかしある文章（この場合は明治憲法全体）の伝達の能力は、単にそのなかの文の一つ一つ（この場合は条文）が

明晰であるかどうかだけで論すべきものではない。個々の文がたとへ明晰で誤解の余地がなくとも、それらが互ひに矛盾してゐたのでは、読者はたちまち了解困難に陥り、眼を白黒させるしかなくなるだろう。すなはち文章においては第一に個々の文がちゃんと内容を伝達し、しかも第二に、互ひに辻褄が合ふ仕掛けになつてゐることが要求されるのである。ところが明治憲法はこの第二の条件もまたみたしてゐない。そのことが最もあらはなのは臣民の権利の条項で、第十九条から第三十条まで、あれやこれやとうるさく保留をつけながらではあるにせよとにかく権利を保障してゐるのに、その反面、まづ第八条の緊急勅令で、次に第十四条の戒嚴令で、そしてさらに第三十一条の非常大権で、それらの権利を根こそぎ奪ひ取るのである。このやうな撞着は、政治論的には権力支配の巧妙な装置と言へるかもしれないが、(しかしわたしは政治論的にも醜惡だと考へる)、文章論の立場で言へば混乱と支離滅裂のしるしだらう。そこには文章が常に持たなければならぬ秩序がまつたかない。

すなはち明治憲法の文章は、礼儀三百威儀三千を装ひながらしかし実は礼儀も威儀もない目茶苦茶なものだつた。口調がよかつたり、トスがきいてたりするせいで、幼稚な読者の眼には立派に見えるかもしれないが、伝達と論理を捨ててかへりみないものはもはや文章ではないのである。いはんや名文であるはずがない。美辞をつらねたり歯切れがよかつたりしてしかし伝達と論理とは忘れ果ててゐる文章と、言葉の選び方はまづいい繰返しは多く、どうにも締らないが、それでもとにかく言ひたいことはちゃんと伝へてゐる文章とがあつて、二つのうちいづれかを選ばなければならぬとすれば、わたしは黙つて後者を取る。それは下手であつてもとにかく文章なのだ。その悲しい典型が現行憲法であることはもはや念を押すまでもなからう。

さて、ここで口直しに真正銘の名文を読もう。林達夫の『旅順陥落』である。彼はまづ、レーニンが同じ題の文章のなかで、日本のブルジョアジーはロシアの専制政治に勝つた、旅順の陥落はツァーリズムの陥落の序曲だと述べてゐることを紹介してから、次のやうに記す。

終戦五年目の八月十五日が近づいてきて、私がはしなくもこのレーニンの文章を思い出したのは、外でもない、戦後

まもなく私の入手した外国雑誌類の中に、スターリンが対日参戦のち将兵に与えたメッセージの全文を見出してそこから甚大な衝撃を受けたという小事件、否、私にとつては大事件があったからである。スターリンによれば、満州に進駐した赤軍将兵は、その父兄がかつてそこで受けた国民的屈辱を雪いで仇をとつたのだ。それを彼は祝福しているのだ。レーニンはわざわざ「恥ずべき敗北を喫したのは、ロシア人民ではなくして、この専制主義である」と断わっている。そのレーニンの「正統的」後継者たるスターリンは、いつこの専制主義とツァーリズムの後継者、否、僭奪者になったのであろう。私はボクロフスキーの『一九〇五年』も読んでいたし、プリボイの『対馬』も読んでいた。「革命的毒氣の掃」の手段としての日本との戦争が、かえつてその「革命的毒氣」でツァーの専制政治をふるえあがらせる一九〇五年の革命にまで高潮したことは、その革命の推進者たちの一番よく知っているところだ。レーニンの思いは、多少の程度においてまたそれはその同志たちの思いでもあつたらう。スターリンだけがその例外だったのでらうか。

その日以来、私はレーニン主義とスターリン主義との相違が、単に共産主義政治と世界革命との旧段階と新段階とに應ずる、その理論的發展の度合いに精密にもとづくという、公式的説明などは相当の条件つきでなくては受け付けられなくなつてしまった。満州の工業施設のほとんど根こそぎ的な撤収、日本捕虜の仮借なき長期使役——つづいて起こつたそれら一連の事象は、それがいかに立派な「革命的」大義名分にもとづくものであつたにしても、頑迷固陋な私の如き「曲学阿世」の徒には、どうしても釈然とできないものであつた。私の「曲学阿世」的空論によると、世界革命の参謀本部たるクレムリンは、それはいかにも似つかわしい画期的に明朗な創意的フェア・プレイでこういう問題を処理すべきで、人々がさんざん見せつけられてきた、黴臭い帝国主義や専制政治に紛れ易いえげつないやり口の踏襲などは夢にもしないはずだったのだ。このおめでたい期待は、次から次へと物の見事に背負投げを食わされた。それが「新世界」からの便りであつただけに、私の狼狽と惜気方は目もあてられなかつた。私は改めて政治というものを勉強し直さねばならぬと痛感した。私はせっせと一所懸命に生きた政治史、わけても共産主義をめぐる国際政局の現勢を扱った文献をたよりに巨大な世界政治の世界に目を皿のように馳せ廻つて来たが、その結果は小心

な私をしてますます政治という政治の裏のおどましさを思い知らされる羽目になったただけである。政治とは腹黒いものであつて常に人の善意を翻弄する——というのが私の阿呆のような「小ブルジョア的」結論であつた。

それはともかくとして、対日戦争を日露戦争の復讐と雪辱に見立てることが、少なくともマルクス・レーニン主義の立場からすれば、これも阿呆のような「ブルジョア的」「帝政的」な子守唄の一種にすぎないことも確かであろう。だからこれがつきとした「レーニン主義者」スターリンのまさか本心から言つてゐることだとは、そうむきになつて思う人間の方がはるかに阿呆なわけである。だが、これを清濁併せ呑む共産主義者の政治的逞しさの結果と見るかは自ら別問題であろう。恐らくはそれはその両者の馴れ合いから来た特殊なスラヴの場合でもあろうか。ただはつきり言い得られることは、仮にソヴェト人民の方でどうしてもこの政治的子守唄（それはソヴェト同盟の対日参戦の直前には色々と手を換え品を換えて歌われていた形跡があるが）を必要としていたのだとすると、彼らはあの精力的なマルクス・レーニン主義的啓蒙を以てしてもなかなか犯し難い帝政時代的庶民の風格を内々一面において持ちつづけていたというわけになる。正にこれは一種の政治的後退である。私のいうのは、ソヴェト共産党の黨員たちや同伴者たちのことではない。その五倍も十倍にも及ぶ底ぬけにお人好しの、あのまことに愛すべきロシア民衆のことである。

林達夫の散文は極めて明るいレンズに似てゐる。われわれはその、癖のない、むづかしい言葉なんかちつとも使はない、なだらかな文章を読んで、彼の散文の存在を忘れ、彼の述べる内容だけを考へ、いや、その内容もいま自分が考へてゐることのやうに感じ、そして心のどこかで、自分は頭がいいからかういふこと（実は林の意見）を考えたのだといふ錯覚をちらりといだく。ちようど上等のレンズを使つた眼鏡をかけて、視力がよいと思ふやうなものだ。これはさういふ透明度の高い、邪魔にならない散文なのである。

この透明度の高さ、ほとんど異常なほどの高さのせいで、林の言はんとすることはわれわれに完全に伝達されるのだが、ここで重要なのは、人間の精神は普遍的なものだといふ確信があるからこのやうな文章が成立つといふ事情である。彼は自分の思考の構造とリズムを尊重して、それに寄り添ひながら、あるいはそれをいつそう鮮明なものにしながら文章を書

く。それゆゑわれわれ読者はそれを自分の思考の構造とリズムにびつたり合ふと感ずるのである。さらにはまるで自分で考えたかのやうに思ふのである。彼の文章が快く理論的なのは、まづこのことに由来するだらう。

『旅順陥落』で語られてゐるのは、レーニズムとスターリニズムとの相違とか政治への嫌悪とかいふやうな單純なことではない。政治の醜惡さを單に政治それ自体のものとして見るのではなく、それが實は民衆の要求に應へたものだとか考へる暗い認識である。しかし林はその場合、民衆の恐しさと無邪氣とを二つながら同時に、一筆がきで書く。これは呆れるくらゐの名人藝だ。一般に達意の文章と評されるものは、細緻なこと精妙なことは避け、あるいは頭から諦め、大ざつばなことを一わたり書いてそれでお茶を濁してゐるものだが、これに反して名文は、あれこれとこみいつた微妙なことをあつさり言つてのけるのである——ちようど林の『旅順陥落』のやうに。しかも彼はこんなに暗澹たる認識を、厭になるくらゐ晴朗にそして典雅に書くのだが、かういふ趣味のよきことは今ここで論じてゐる問題とはまた別の話だ。林の文章に見られるやうな微笑や冷笑、皮肉や韜晦、総じて言へば表情の豊かさについては、そのうちにまた触れる機会があるかもしれない。

さうさう、明晰でない文章はいけないといふことについては、多少の補説が必要だらう。美文とでも言へばいいのかしら、多義性をうまく使つて効果をあげてゐる文章がいろいろあるからだ。しかしこのことについて説明するには、いつそ詩の場合を考へればいちばん判りやすいだらう。美文は普通の散文と詩との中間形態と見て差支へないし、そして詩はこの曖昧性Ⅱ多義性を利用するのが常だからである。

たとへば、『古今』巻第十一「恋歌」、読人しらず、

ほととぎす鳴くやさつきのあやめ草あやめも知らぬ戀もするかな

この和歌はさまざまの点で意味の明確さを欠く。そのことをいちいち分析するのはわづらはしいけれど、第一、夢中になつて恋をするのは、

① 五月に、なのか、

② 人生の五月すなわち青春において、なのか、

③ 人間はいつでも、なのか、

それすらはつきりと答へることは誰にもできない。①②③のいづれもそれぞれ正しく、①と②と③の三つを打重ねて言つてゐると見ても正しく、さらに①と②、①と③、②と③といふ三通りの組合せが可能だとも言へるのである。詩において一般に、言葉の多義性によつて、かういふ濃密で渾沌たる情緒がかもし出される。それが詩人の詩作の目的であり、そしてここからさきが特に大切なのだが、読者が詩を読むことの目的であると言つてもよからう。詩においては、詩人と読者との合意の上で言葉は多義的に用ゐられるし、逆に言へば詩の言葉が曖昧であり明晰ではないのはいはば合目的なことなのだ。散文の言語は具体的な事物、精確な観念を指示し伝達しなければならぬのに対し、詩の言語は感情を喚起することをもつてその基本的な機能とするのである。

断るまでもなく、憲法は詩でもなければ美文でもない。小唄でもなければ浪花節でもない。それはごく普通の散文である。従つて達意を旨としなければならぬし、着実な論理性を身に備へてゐなければならぬ。そのことを忘れた憲法は滑稽であり悲惨である——ちようどさういふ憲法を名文などと讃美して浮れる者と同じやうに。

かつて幸徳秋水はその『兆民先生』において記した。

明治二十二年春、憲法發布せらるる、全國の民歡呼湧くが如し。先生嘆じて曰く、吾人賜與せらるるの憲法果して如何の物乎、玉耶將た瓦耶、未だ其實を見るに及ばずして、先づ其名に酔ふ、我國民の愚にして狂なる、何ぞ如此くなるやと。憲法の全文到達するに及んで、先生通讀一遍唯だ苦笑する耳。

民主共和の主義を奉ずる中江兆民は、明治憲法の政治思想にももちろん「苦笑」を禁じ得なかつたであらう。が、それだけではあるまい。秋水のいはゆる「匹夫にして百世の師となり、一言にして天下の法となる」当代随一の論客、兆民にとつて、明治二十二年の憲法は、文章必須の条件をなげうつて虚勢を張るその書きぶりのゆゑにもまた、ただ「苦笑」す

るしかないものだつたのであらう。

①

第十九條 日本臣民ハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ應シ均ク文武官ニ任セラレ及其ノ他ノ公務ニ就クコトヲ得

第二十二條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ居住及移轉ノ自由ヲ有ス

第二十三條 日本臣民ハ法律ニ依ルニ非スシテ逮捕監禁審問處罰ヲ受クルコトナシ

第二十四條 日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ奪ハルコトナシ

第二十五條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外其ノ許諾ナクシテ住所ニ侵入セラレ及搜索セラル、コトナシ

第二十六條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外信書ノ秘密ヲ侵サルコトナシ

第二十七條 日本臣民ハ其ノ所有權ヲ侵サルコトナシ

②公益ノ爲必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

第二十八條 日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス

第二十九條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言論著作印行集會及結社ノ自由ヲ有ス

第三十條 日本臣民ハ相當ノ敬禮ヲ守リ別ニ定ムル所ノ規程ニ從ヒ請願ヲ爲スコトヲ得

第八條 天皇ハ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其ノ災厄ヲ避クル爲緊急ノ必要ニ由リ帝國議會閉會ノ場合ニ於テ法律ニ代ルヘキ勅令ヲ發ス

②此ノ勅令ハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出スヘシ若議會ニ於テ承諾セサルトキハ政府ハ將來ニ向テ其ノ効力ヲ失フコトヲ公布スヘシ

第十四條 天皇ハ戒嚴ヲ宣告ス

②戒嚴ノ要件及効力ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第三十一條 本章ニ掲ケタル條規ハ戰時又ハ國家事變ノ場合ニ於テ天皇大權ノ施行ヲ妨クルコトナシ

①と②ならば、「五月には、殊に若者は、恋に夢中になる」という意味になる。①と③ならば、「人間はいつでもそんなのだが、殊に五月には……」。

②と③ならば、「人間はいつでもそんなのだが、殊に青春においては……」。そして①②③を重ねた場合には、「人間はいつでもそんなのだが、殊に青春のころ、特に五月には……」。

この句は蘇東坡の『潮州韓文公廟碑』にもとづく。すなはち幸徳秋水は中江兆民を韓退之になぞらへたのである。

一匹と九十九匹と

ひとつの反時代的考察

今日、ぼくたちは混乱のただなかにいる。といってぼくはなにも敗戦後の現象的なさわがしさをいつているのではない。有能な政治や思想的な啓蒙が解決しうる困難は知性にまかしておけばいい。ぼくたちのおちいつている真の混乱は日本の近代とともにじまった。そしてこの七十年、ぼくたちはつねに混乱の季節のうちに生きてきたのであり、それ以外のものを知ってはいない。混乱こそがぼくたちの生をやしなつてきた糧であり、それゆえにぼくたちはぼくたちをとりまく風景が混乱のそれであることすら感覚しえないありさまである。今日もしあたらしい時代がひらかれようとするならば、まずこの混乱をただし、この混乱を明きらめることからはじまらねばならぬ。いや、いまはなにより混乱そのものに気づくことがたいせつである。現代におけるあらゆる現象的なさわがしさは、この混乱に無感覚であることから生じている。

だれもかれもおのれの立場を固執してゆずらない。それは思想や信念のたしかさからきているのではなく、むしろその逆であり、思想をもちえぬがゆえに、眼前の事象にとらわれてうごきとれぬのである。ひとびとのかたくなさはひとえに事実のかたくなさにすぎない。ある立場や見解と他の立場や見解とが相争うようにみえても、じっさいそれらの立場や見解の底にあるひとつの現実と他の現実とがぶつかりあっているだけのことである。今日どこを見ても、思想の片鱗すらみとめられぬ。存在するのは思想ではなく、したがって人間ではなく、ただ事実の断片のみである。

論争に参与するのは知性である。思想は論争しない。ひとりの人間の肉体がそうであるように、思想もまた弱点は弱点としておのれを完成する。ところが論争はつねにいずれかの側に正邪、適不適の判定を予想するものである。はじめから決着を度外視して論争はなりたたぬ。ひとびとは論争において二つの思想の接触面しかみることができない。論争するものもこの共通の場においてしかものをいえぬ。この接触面において出あった二つの思想は、論争が深まりすればするほど、おのれの思想たる性格を脱落してゆく。かれらは自分がどこからやってきたかその発生の地盤をわすれてしまうのである。

しかも論争にやぶれたものは相手の論理の正しさに手も足も出なくなりながら、なお心のどこかでおのれの正当を主張するものを感じている。このさいかれのなすべきもつとも賢明な方法は、まず論争からしりぞき、自己の深奥にかえってそこから出なおすことをおいてほかにない。が、ひとびとはそれをしない。あくまで接触面に拘泥し、論理に固執して、なんとか相手をうちまかそうところみる。それがおおくのひとびとをゆがめられた権力欲にかりたて、たがいにおのれをたて、他を否定してはばかりしめぬのである。

他者を否定しなければなりたたぬ自己といふようなものをぼくははじめから信じていない。ぼくたちの苦しまねばならぬのは自己を自己そのものとして存在せしめることでなければならぬ。この苦闘に思想が参与する。もしそこに犠牲がいるとするならば、それは自己そのものであつて、他人の存在をおびやかすことは許されぬ。ひとびとの考えることで容易に決着のつくこと、一の正しさが他の誤謬を証明するようなもの、それらはことごとくつまらぬものでしかない。思想史は無数の矛盾撞着にみちみちている。氣のはい思案家はそのことを自己の懷疑思想の動機とする。が、これほどばかりしいことはない。ぼくは相反する思想にみたされた二千年の思想史を、その矛盾のゆえに信ずるのである。それらはたがい矛盾するものであるがゆえに思想であり、思想であるがゆえに今日まで残っている。そのときそのときに決着されてきたものは、半世紀のいのちを保つことすらめずらしい。

すでにあきらかであろう——ぼくのいう今日の混乱とは、容易に決着のつかぬ問題をただちに決着しようとすることから、というよりは、決着のできぬ問題を決着の可能な場で考えることから生じたものである。近代日本の焦燥はあらゆることを処理し決着しようとしてきた。決着のできぬことをそのまま放置したのならばまだしもであるが、ぼくたちの目的は問題そのものではなく、ただその決着にあつたのであり、したがってあらゆる問題をむりにも決着できるものとしてあつかつてきたのである。いまだぼくたちはその病弊から脱しきつてはいない。いや、その混乱は今日その頂点をきわめたかにみえる。ぼくたちにとつていまもつとも必要なことは自分自身にかえることである。ぼくたちの思惟が他人の思惟とくいちがうとき、あるいは現実の抵抗を感じるとき、ぼくたちのなさねばならぬことは、それらを性急にくみふせようとあせることなく、まず自己の發生の地盤を見いだすことである。ぼくはそういうことによつてたんなる敗北主義を意味

しているのではない。ぼくのおそれるのは問題の決着への拘泥が自己を限定し抑圧することであり、さらにその結果は決着そのものさえほんとうにはもちきたらされぬということである。なぜなら限定し抑圧された自己はそのまま圧死したものでない以上、いつかかならずそのむりな決着に謀反し、その解決をくつがえすであろう。

ぼくたちはながい混乱の季節なかであつて政治のことはで文学を語る習慣をすっかり身につけてしまつてゐる。ひとびとはいまだにこの混乱に気づこうとしない。のみならずぼくたちの文学の宿命的な薄弱さが政治意識の貧困からきてゐるという常識は、ひとびとをしてこの混乱から脱却させるよりも、むしろ混乱のうゑに混乱をかさねる結果を招来せしめてゐる。

由来、ぼくたちの人生観を妙にあつさりわかりやすいものにするひとつの危険な俗論があり、この俗論には知識人や思想家も案外たやすくまいつてきたものである。というのは人生がひとつの目的を有し、人間活動のあらゆる分野がそれぞれの分担においてこの目的にむかつてうごいてゐるという考えである。このような歴史の合目的性を意識し愛好することは、いわば知識人の標識でもあり、特権でもあつた。なにもぼくはそのことを否定しようというのではない。が、なんとかしてこの目的を意識のうゑにのぼせて、それを眼前ににらんでいないと、自己の存在と活動との根柢に不安を感じてやまぬということになれば、それは知識人の弱さであり、知性のもつ本能的な恐怖感にほかならない。この意味において現代に欠如してゐるものは知性ではなく、むしろ知性が現代の混乱をおそれ混乱を増大してゐるのである。

ひとびとの愛好する方式によれば、文学も美術もおなじ美神につかえるものであり、哲学も科学も芸術もおなじ人生の目的にむかつてそのいとなみをつづけるものなのである。政治家の目的と文学者の目的とはおなじであり、ともに人間の解放と幸福のためたたかう戦士である。このような考えかたは政治家をして容易に文学者の仕事を理解せしめ、文学者をしてしごく單純に政治家のしごとを理解せしめ、のみならずなにもも生産することを知らない学生をしてすらあらゆる文化領域のいとなみを了解せしめるがゆゑに、自己の人生観を一日もはやくまとめておきたいひとびとによつて好まれ

てきたのである。

が、ぼくたちはあらゆる文化価値を享受しようとしても、その創造のいとなみを、その由つてきたところをかならずしも理解しえぬのみならず、またそれを理解する必要はない。その理解する必要のないことをはつきりそうといいきらぬために——知らぬ世界を知らぬままに放置する寛容さのないために、ひとびとは知らなければならぬ自己を知りえず、自己のいとなみを完全にはたすことができないのである。のみならず、たがいに相手のいとなみを理解しようとし、また理解したとおもいこむ習慣が、相手をおのれの理解のうちに閉じこめてしまい、その完全ないとなみを妨げる。政治は政治のことばで文学を理解しようとして文学を殺し、文学は文学のことばで政治を理解しようとして政治を殺してしまう。ぼくたちがぼくたちの近代をかえりみるばあい今日のあいことばになつてゐる政治と文学との乖離ということも、この意味においてふたたび考えなおされねばならない。

ぼくはひとつの前提から出発する——政治と文学とは本来相反する方向にむかうべきものであり、たがいにその混同を排しなければならぬ。そこに共通の目的があるかどうか、またあるとすればそれはなんであるか、そのようなことを規定する努力はおよそくだらぬことである——ぼくたちがおなじ社会のうちに生息し、ひとつかまのめしを食つてゐるかぎり。ぼくはこの連帯感を信ずるがゆえに、安んじて文学と政治とを反発せしめてはばからぬのである。ここにぼくは文学者として政治に反発する。政治がきらいだからでもなく、政治を軽蔑するからでもない。政治に対するぼくの反発は政治の否定を意味するものではない。それは政治の十全な自己発揮を前提としてゐる。またぼくの反発は悪しき政治にむけられるものではない。善き政治に、ないしは善き政治への意図にむけられるものである——もちろんぼくも善き政治のおこなわれるのをねがうことにおいて人後におちるものではなく、にもかかわらずこれに反発するのである。

ぼくは——ぼく自身の性格は政治の酷薄さにたえられない。その酷薄さを是認するにもかかわらず——いや、それを是認するがゆえにたえられないのである。そういうぼくの眼にプロレタリア革命の理論は苛酷きわまりないものとして映じ、さらに戦争中の政治の指導原理はなんともがまんならぬものでしかなかった。こうしてぼくはものごころついてから現在にいたるまでたえず政治の脅威を身に感じてきたのである。が、その間、ぼくはそれをおそれて孤独に閉じこもりはしな

かった。ぼくはそのような孤立への偏向をみずから警戒していたし、孤立が自分のためになにもかを生むものとは信じていなかった。ぼくはむしろ自分の力の可能な範囲内で政治的、社会的にふるまってきた。というのは、政治のことばで文学を語る危険をおそれたと同様に、文学のことばで政治を語る愚劣をおそれたからにほかならない。知性や行動によって解決のつく問題を思想や個性の場で考え、それをいたずらにうごきのとれぬものと化するあやまちを避けたかったからである。

ぼくはぼく自身の内部において政治と文学とを截然と区別するようにつとめてきた。その十年あまりのあいだ、こうしたぼくの心をつねに領していたひとつのことばがある。「なんじらのうちたれか、百匹の羊をもたんに、もしその一匹を失わば、九十九匹を野におき、失せたるものを見いだすまではたずねざらんや。」(ルカ伝第十五章)はじめてこのイエスのことばにぶつかったとき、ぼくはその比喩の意味を正當に解釈しえずして、しかもその深さを直観した。もちろん正統派の解釈は蕩児の帰宅と同様に、一度も罪を犯したことのないものよりも罪を犯してふたたび神のもとにもどってきたものに、より大きな愛情をもって対するクリスト者の態度を説いたものとしている。たしかにルカ伝第十五章はなおそのあとにこう綴っている——「ついに見いださば、喜びてこれをおのが肩にかけ、家に帰りてその友と隣人と呼びあつめてい万ん、『われとともに喜び、失せたるわが羊を見いだせり』われなんじらに告ぐ、かくのごとく、悔い改むるひとりの罪人のためには、悔い改めの必要なき九十九人の正しきものにもまさりて天に喜びあるべし。」

が、天の存在を信じることできぬぼくはこの比喩をぼくなり現代ふう解釈してしたのである。このことばこそ政治と文学との差異をおそらく人類最初に感取した精神のそれであると、ぼくはそうおもいこんでしまったのだ。かれは政治の意図が「九十九人の正しきもの」のうえにあることを知っていたのにそういない。かれはそこに政治の力を信ずるとともにその限界をも見ていた。なぜならかれの眼は執拗に「ひとりの罪人」のうえに注がれていたからにほかならぬ。九十九匹を救えても、残りの一匹においてその無力を暴露するならば、政治とはいったいなものであるか——イエスはそう反問している。かれの比喩をとおして、ぼくはぼく自身のおもいのどこにあるか、ようやくにしてその所在をたしかめえたのである。ぼくもまた「九十九匹を野におき、失せたるもの」にかかずらわざるをえない人間のひとりである。

もし文学も——いや、文学にしてなおこの失せたる一匹を無視するとしたならば、その一匹はいつたいなによつて救われようか。

善き政治はおのれの限界を意識して、失せたる一匹の救いを文学に期待する。が、悪しき政治は文学を動員しておのれにつかえしめ、文学者にもまた一匹の無視を強要する。しかもこの犠牲は大多数と進歩との名分のもとにおこなわれるのである。くりかえしていうが、ぼくは文学の名において政治の罪惡を摘発しようとするものではない。ぼくは政治の限界を承知のうえでその意圖をみとめる。現実が政治を必要としているのである。が、それはあくまで必要とする範囲内で必要としているのにすぎない。革命を意圖する政治はそのかぎりにおいて正しい。また国民を戦争にかりやる政治も、ときにそのかぎりにおいて正しい。しかし善き政治であれ悪しき政治であれ、それが政治である以上、そこにはかならず失せたる一匹が残存する。文学者たるものはおのれ自身のうちにこの一匹の失意と疑惑と苦痛と迷いとを体感していなければならぬ。

この一匹の救いにかれは一切が無かを賭けているのである。なぜなら政治の見のがした一匹を救いとることができたならば、かれはすべてを救うことができるのである。ここに「ひとりの罪人」はかれにとつてたんなるひとりではない。かれはこのひとりとおして全人間をみつめている。善き文学と悪しき文学との別は、この一匹をどこに見いだすかによつてきまるのである。一流の文学はつねにそれを九十九匹のそれに見てきた。が、一流の文学はこの一匹をたずねて九十九匹のあいだをうろついている。なるほど政治の頽廢期においては、その悪しき政治によつて救われるのは十匹か二十匹の少数にすぎない。それゆえに迷える最後の「一匹」もまた残余の八十匹か九十匹のうちにまぎれている。ひとびとは悪しき政治に見すてられた九十九匹に目くらみ、真に迷える一匹の所在を見うしなう。これをよく識別しうるものはすぐれた精神のみである。なぜなら、かれは自分自身のうちにその一匹の所在を感じているがゆえに、これを他のもののうちに見うしなうはずがない。

近代日本の文学が弱体であつたとしても、その原因を政治意識の稀薄に帰することはできない。もちろんそのような反省はそのかぎりにおいて正しいものであり、それを否定しようとはおもわぬ。が、ぼくたちの反省がその程度でとどまつて

いるかぎり、ぼくはその結果を信じえない、政治のことはで文学を語る混乱とはそのことなのである。それはいかに正しい立言であつても、それだけでは反省とはなりえぬ。それは「美しい」を「きれい」と解釈する虎の巻流のいいなおしにすぎない。そこからはなにも生れてはこないであらう。ぼくの知りうるかぎり、ぼくたちの文学の薄弱さは、失せたる一匹を自己のうちの最後のぎりぎりのところで見ていなかった——いや、そこまで純粹においてこまれることを知らなかった国民の悲しさであつた。しかもぼくたちの作家のひとりびとりはそれぞれ自己の最後の地点でたたかっていたのである。その意味において近代日本の文学は世界のどこに出しても恥しくない一流の作家の手によつてなつた。が、かれらの下降しえた自己のうちの最後の地点は、彼等に関するかぎり最後のものでありながら、なおよく人間性の底をついてはいなかった。なぜであるか——いうまでもない、悪しき政治がそれ自身の負うべき負荷を文学に負わせていたからである。政治が十匹の責任しか負いえぬとすれば、文学は残りの九十匹を背負ひこまねばならず、しかもぼくたちの先達はこれを最後の一匹としてあつかわざるをえなかつた。その一匹が不純なものたらざるをえず、この意味においてぼくたちの近代はそのほとんどことごとくを抹殺しても惜しくはない五流の文学しかもちえなかつたのである。

たしかにぼくのことばは矛盾している。が、なぜそのように考へてはいけなにか——ひとびとは肯定しなければ否定せずにいられず、否定しなければ肯定せずにいられぬのであらうか。ぼくはぼく自身の現実を二律背反のうちにとらえるがゆえに、人間世界を二元論によつて理解するのである。ぼくにとつて、真理は究極において一元に帰一することがない。あらゆる事象の本質に、矛盾対立して永遠に平行のままに存在する二元を見るのである。この対立を消去して一元を見いだそうとするひとびとの性急さが、じつはぼくにはふしぎに見えてしかたないのである。ひとは二律背反をふくむ彼自身の人格の統一を信じていないのだらうか。もし信じているならば、なにをこのうえ知性による矛盾の解決を求むることがあらうか。矛盾を放置してかえりみず、矛盾をそのままあらわにしてしかもののいえぬぼくは、この矛盾をいちおう解決した形において述べる科学にささかの関心もちえない。

しかし現代人のもつとも愛好するものがその科学である。ひとびとはすべての事物を——人間とその生活とをさえ、学問の対象と化そうと欲する、ここに知性が常識の倉からよびいだされる。が、はたして知性は事物を認識しうるであらうか。

それはたかだか現象を整理して仮説をたててみるにすぎぬのではなからうか———なんのために———いうまでもなく、ぼくたちが外界により正しく適応することによって、ぼくたちの生活をより快適にするために。それゆえに———その効用性のためにのみ、科学の仮説はその権利を主張しうる。そしてそれ以上の権利を要求する資格はない。仮説は、またその仮説をくみだてる知性の方法は、けつして真理とはなんの関係ももってはいない。知性は生活の便宜的手段であつて、それ以上のものではない。

が、あらゆる人間のいとなみがそうであるように、学問はその効用性から出発してみずからの自律性を要求し、それ自身を権威づけようとする。ここでもぼくははじめをたててこの必要を痛感する。科学は効用性に出発し、あくまで効用性にとどまるものであり、したがつてその仮説の真偽は外界への適応の不可によってきまるものである以上、それは徹頭徹尾合理性に終始せねばならず、いかなる微細な点においても矛盾は許されぬ。が、人間の文化価値のすべてを科学の対象にせねば気がすまぬとすれば、それは知性の越権といふべきか、それとも知識的事大主義といふべきか、いずれにしても自己を信じえぬ薄弱な精神の所為とせねばならぬ。ことわつておくが、いまさらぼくは素朴な不可知論にひとびとを誘導しようとしてゐるのではない。ここでもぼくは實在の可知と不可知とははじめからきめてかからねば気の安まらぬ習慣をさげすむものである。ぼくはただ現実をみつめていただけのことたりる。そして現実をあきらかに合理の領域と不合理の領域とを同時に並存せしめてゐる。とすれば、現実を認識するということは、この二つの領域の矛盾を矛盾のままに把握することではあるまい。この地点からさきにおいて、ぼくは科学の無力をいわざるをえぬ。

ぼくはなんのためにこのようなまわりみちをしたのか———つまりは政治と文学との混同をさけたいという、おなじその心からにほかならない。政治も政治学もぼくたちが外界に適応しようとするために用いる生活の便宜的手段であり、その意味において科学と同様に常識のうえにたつてゐる。が、文学はまた文学について語ることはついに学としてなりたちえぬ。今日までいくたびか文学の合理性と効用性とを証明しようとするおろかな企てがこころみられ、そのたびに失敗してきたが、ひとびとはいまなおそれをあきらめようとはしない。いや、現代の流行は近代日本の歴史を反省するという名目によつて、ますますその風潮を強めようとしてゐるかにみえる。とすれば、神がかり的非合理の跋扈に代るに合理主義の

專横（せんわう）を見るといふだけのことにすぎない。知性（ちせい）の解決（かいけつ）しうる領域（りやういき）において知性（ちせい）を廃棄（はいき）することが神秘主義（しんぴしゆぎ）なのであって、知性（ちせい）の力（ちから）およびぬところ（ところ）にぼくたちは男らしく知性（ちせい）を放棄（ほうき）すべきなのである——知性（ちせい）の力（ちから）およびぬ領域（りやういき）の存在（そんざい）を信（しん）ずるかぎりは。

そしてまた知性（ちせい）の力（ちから）およびぬ領域（りやういき）などというものの存在（そんざい）を信（しん）じないとするならば——それもよい、ぼくは敵（てき）ながらあつばれいさぎよい態度（たいど）としてこれをみとめるにやぶさかではない——が、それならば、そのひとは文学（ぶんがく）に背（せ）をむけるべきである。いや、ぼくは少々結論（けつろん）を急（いそ）ぎすぎた。たとえ知性（ちせい）過信（かしん）をみずから宣言（げんげん）しようとも、もしかれの作品（さくひん）がすぐれているならば、その作品（さくひん）はかれの唯一（ゆいいつ）の頼（たの）みの綱（つな）にした知性（ちせい）を裏切（うらぎ）つて、かれの人間（にんげん）全体（ぜんたい）を合理（ごうり）と非合理（ひごうり）との矛盾（むじ）対立（たいりつ）のままに統一（とういつ）し完成（かんせい）したものと露呈（ろてい）しているのにさういなく、かれの言説（げんせつ）いかんにかかわらず、かれはかれ自身のうちに見（み）しなわれた一匹（いっぴき）の羊（ひつじ）をもっているのである。が、ぼくはひるがえつてふたたびかれに疑惑（ぎわく）をいだく——それならばなぜかれは自分のうちに見（み）しなわれた一匹（いっぴき）の存在（そんざい）を告白（こくはく）しないのか。かれがそれを正直（しんじき）に告白（こくはく）せぬかぎり、文学（ぶんがく）の領域（りやういき）に政治（せいじ）がしのび入り、事態（じたい）はますます紛糾（はんききう）するであろう。

ぼくがいままで述（の）べてきた文学（ぶんがく）と政治（せいじ）との対立（たいりつ）の底（そこ）には、じつは個人（こじん）と社会（しゃかい）との対立（たいりつ）がひそんでいるのである。ここでもひとびとはものごとを一元（いちげん）的に考（かん）えたがり、個人（こじん）の側（がわ）にか社会（しゃかい）の側（がわ）にか軍配（ぐんぱい）をあげようところみてきた。そして現代（げんだい）の風潮（ふうそう）は、その左翼（さよく）と右翼（うよく）とのいづれを問（と）わず、社会（しゃかい）の名（な）において個人（こじん）を抹殺（まっころ）しようともくろんでいる。ゆえに個人（こじん）の名（な）において社会（しゃかい）に抗議（こうぎ）するものは、反動（はんどう）か時代錯誤（じだいさくご）のレッテルをはられる。ここにぼくの反時代（はんじだい）的（てき）考察（こうさつ）がなりたつ。が、それは反時代（はんじだい）的（てき）、反語（はんご）的（てき）であっても、けつして反動（はんどう）ではありえない。もし反動（はんどう）といふことばのそのような使（つか）いかたが許（ゆる）されるならば、むしろそれは反対（はんたい）の立場（たてば）にかぶせられるべきものであらう。ぼくは相手（あいて）を否定（ひてい）せんと企（く）てているのではなく、ただおのれの扼殺（やくせつ）される危険（けんけん）を感じ（かん）じているのにすぎない。

失（う）せたる一匹（いっぴき）の無視（むし）せられることはなにも現代（げんだい）にかぎつたことではない。が、それはつねにやむをえざる悪（あく）としてみと

められてきたのであって、今日のごとく大義名分をもつてその抹殺を正当化した時代は他になかった。それは一時の便法ではなく、永遠の真理として肯定されようとしている。いや、現代はその一匹の失われることすらみとめようとはしない。社会はその框のそとに一匹の残余すらもつはずのないものとして規定せられる。個人は社会的なものをとおして以外に、それ自身の価値を、それ自身の世界をもつことを許されない。社会は個人をその残余としてみとめず、矛盾対立するものとして拒否するのである。だが、矛盾対立するものはなぜ存在してはいけないのか。いや、そのことよりも、個人はこのみずからの危機に際会してなぜ抗議しないのか。

ぼくがこの数年間たえず感じてきた脅威は、ミリタリズムそのものでもなければナシヨナリズムそのものでもなかった。それはそれらの背後にひそむ個人抹殺の暴力であり、その意味においてボルシェヴィズムにも通ずるものであった。しかしこうして戦争中にぼく自身の感じていた危機にぼくはどう抗議してよいか途方にくれた。反戦的言動がただちにぼくの恐怖をとりぞいてくれるものとはうそにも信じられなかったのである。ぼくの敵は賢明にも煙幕を張っていた。このときぼくは——ぼくのわずかになしたといえ、ロレンスの「黙示録論」を訳出することにすぎなかった。が、その出版はついに許可されなかった。ぼくはぼくたちの同人雑誌にその解説を書いて、せめてもの鬱をはらした。

しかし今世紀における個人の敗退はいったいなにを意味するものであろうか。それはいかなる原因によるものであろうか。いうまでもない。ぼくたちが個人の存在権にひきめを感じるようになった原因は、前世紀における個人の勝利そのもののうちに見いだされねばならぬのである。個人が社会から離反し、社会的価値に対する個人的価値の優位を信じ、一が他を軽視否定したこと、そのことのうちに個人の不安とうしろめたさとが胚胎した。いかなる点においても社会とつながらず、いかなる点においても社会的価値と通じていない個人というものを考えるならば、それが、現代における社会的なものの攻勢に対して、その個人的価値の暴力的抹殺に対して、なんら抗弁すべき拠りどころをもたなかったというのも当然であろう。もちろん現世紀にはいつても個人の側から孤独な精神がいくたび反撃をこころみてはきた。が、ふしぎなことに、その反撃のうちにひそかにみずからの代弁者を見ていた知識階級がついにこれを支持しようとはしなかった。ぼくはそのことのうちに忌むらしい卑劣と臆病とをしかみとめることができない。

たとえばジッドの「ソヴェト紀行」についても、知識階級はまず自分たちのものわかりのよさを示そうとつとめる。で、彼等のなしたことはといえば、ジッドのコムミュニズム転向に関して前世紀個人主義の限界を看取することであり、かれの觀察に猜疑の眼をむけ、したがって政治の善き意図と善き名分とのもとにおこなわれる過失を一時のゆきすぎとして寛容に黙認しようとするのであった。かれらのなによりもおそれたことは、歴史の必然性について、新時代の思想とそのころみについて、自分たちの無理解を表明することであり、そしてまたかれらの神でもある知性に刃むかうことであつた。このようなかれらの恐怖はたしかにいわれなきことではない。かれらは自己のうちになんら恃むにたるものをもつていなかった。社会との連関を失つたかれらは自分たちが社会に役だつ存在であるという自信もまた失つていた。そして社会に役だつ自己というこの前提なしに、かれらはいかなる自己主張をもなしえず、現世紀の不法な個人抹殺に対して沈黙する以外に道がなかったわけである。かくしてかれらはかれら自身の代弁者にすら冷淡と疑惑とをもつて対するよりほかはなかつた。

ぼくは戦争中における日本の知識階級や文学者たちの戦争協力をこの意味においてしか理解しえない。ミリタリズムが彼等の氣にいったわけではない。帝国主義に彼等が賛同したわけでもない。ただかれらはそれらに抗弁するだけの根拠を自己のうちにもたなかつたまでである。もちろんファシズムの狂熱と虚安とを一挙にうちやぶるより優位の世界觀をかれらが知らなかつたはずもなからう——にもかかわらず、かれらの内部に棲む薄弱な個人を捲きこんだのは戦争の現実であつて、一片のファシズム理論などではなかつた。この現実には彼等の個人が足をさらわれたという意味において、ぼくは戦争中の知識階級の狂態を一時期前のコムミュニズムの流行と同一視するのになんのさわりも感じない。その当時にあつても彼等の眼を奪つたものはコムミュニズムそのものであるよりは現実の力であり、その反面に彼等の自我の空虚さであつた。そして右翼と左翼との別を問わず、その背後にある社会的価値に対する個人の劣等意識こそ、今日もまたぼくの眼に看過しえぬ大きな問題として映じているのにほかならない。

ひとびとはあらゆる個人的価値の底にエゴイズムを見、それゆえに個人は社会のまえに羞恥する。が、現実を見るがい——社会正義という觀念の流行にもかかわらず、現実には醜惡な自我の赤裸々な闘争の場となつていのではないか、い

や、なお悪いことに、あらゆる社会正義の裏口からエゴイズムがそつとひとしれずしのびこんでいる。当然である——いかに抑圧しようとしてもけつして消滅しきれぬ自我であり、それゆえに大通りの通行禁止にあつてみれば、裏口にまわるよりほかに手はなかったというわけである。ぼくがもつともおそれるのはそのことにほかならない。社会正義の名によりひとびとが蛇蝎のごとく忌み憎んだエゴイズムとは、かくして社会正義それ自身の専横のもちきたらした当然の帰結にほかならぬのである。現代のオプティミズムは政治意識と社会意識とを強調しているが——それはそのかぎりにおいて正当な主張であるとしても——このさいひとびとの脳裏にある図式は、いささかの私心も野望もなき個人というものの集合のうえに成りたっている。たしかにかれらの世界観は知性の科学によつて空想的ユートピアに墮落することをまぬかれてはいよう。が、個人の秘密を看過したことにおいて、個人が小宇宙であるという古めかしい箴言を一片のほぐとして葬りさつたことにおいて、さらに社会意識というものによつて個人を完全に包摂しうると考えたことにおいて、まさに空想的、観念的なユートピアの域をいでぬものであらう。

しかし文学者や知識階級の過去における政治意識、社会意識の欠如を指摘し、かれらにその正しい把握をすすめることは、たしかに健全な主張である。なぜなら、かれらが今日まで政治と社会とに対する関心をもたなかったことが、政治に対して文学を、社会に対して個人を押しだす自信をもたしめなかったからである。政治と社会とに対する正当な関心があるとすれば——そういう正しい関心と意識とをもつた個人であるならば、個人の抹殺に対して抗議するのになんの羞恥もうしろめたさもいらぬではないか。いや、羞恥や体裁の問題ではない、今日、個人は生か死かの問題に当面しているのである。今日の知識階級は、かれらが知識階級としての権利と義務とを放棄せぬかぎり、なにものにかえても個人の存在権を擁護しなければならない。もしこの役割をのがれてこの混乱期をのりきろうとねがうならば、後代はおそらくぼくたちを非難してやまぬであらう——しかも皮肉なことに、ぼくたちがより広い意味において政治的、社会的視野をもちえず、時代の歴史的必然性を見ぬきえなかつたというかどによつて。

ぼくたちはエゴイズムのために個人を羞恥している。が、エゴイズムは個人の責任ではない。エゴイズムがときに醜惡な表情をとるとしても、それはあくまで社会正義に逐いこまれて窮した個人のすがたにほかならぬ。とすれば、罪は個人

をそういう窮状に逐いこんだ社会正義の側に帰せられねばならない。ぼくはつまらぬ詭弁を弄しているのではない。現在、戦争の性格が問題にされ、その帝国主義的野望が批判されているにもかかわらず、たとえそれが侵略戦争であつたにしても、その末期において国民の大部分が反軍的、反戦的気分におちいつていったのは、けつしてこの戦いが邪悪なものであるという理性的批判からいであつたものではなく、たんに自分たちの生活とがおよびやかされているというエゴイズムから生れたものであるという単純な事実が見のがされている。が、ぼくたちはこの単純な事実をはつきり見てとらねばならぬ。この事実によつてぼくたちの理解しうることは、一億の民衆のひとりひとりを忠良な臣民であり、無私の愛国者であり、隣人のためには自己の安逸をすててかえりみない愛他的な理想国民であると考えた軍人の頭脳の計りうべからざる愚かさであろう。そしてそういう彼等の頭脳を支配していた観念こそは国家正義であり、それが個人を抹殺したのである——しかも彼等は彼等の国家正義のかげに権力欲の満足がかくされていたことすら気づかなかつたか、それとも気づかぬふりをよそおつていた。

さらに、このような名分のうしろでじつはエゴイズムとエゴイズムとの相克がおこなわれていた事実を忘却したかのようには、ただ戦争の性格を論じ、敗戦によつてその邪悪の勢力の倒れたことをよるこび、当時のまことに個人的な心理的事実を無視してしまうこと、そのことのうちにふたたび——今度は国家正義ではないが——社会正義の無批判的な信仰が復活するのである。いまや、こうしてひとびとはぼくたちのひとりひとりが善良なる社会人であるという想定のもとに、いや、そういう強要のもとに現実の苦難を切りぬけようとしているかにみえる。これこそ観念論的オプティミズムといわずしてなんであろうか。そしてこのオプティミズムをしていつそう悪質なものたらしめている実情として、ぼくたちは社会正義のうちにもまたエゴイズムの支柱を見のがしえぬのである。もちろん社会正義への情熱をすべてエゴイズムの一語をもつて覆うことは許されぬし、たとえエゴイズムであるにしても、それが社会的福祉にむかつて以上とやかくいふべきすじあいのものではないという論拠もなりたつのであるが、じつはそこに危険がありはしないか。なぜなら、ひとびとは、そのような論理の煙幕をはるることによつて、人間というものがエゴイズムの満足を考えられずにはなにごともしえぬ動物であるという事実を眼をそらしているからである。社会正義がエゴイズムに支えられていること、それはそれでいいが、

それでいてその事実を自覚し是認しないということになれば、事態は許しがたいものとなろうし、わざわいはほとんど收拾しがたいものとなるであろう。

ふたたび誤解をさけるためにことわっておくが、ぼくは文学者が政治意識をもたなくてはならぬとかなんとか、そういう場でものをいつているのではない。政治と文化との一致、社会と個人との融合ということがぼくたちの理想であること——そのことはあたかも水を得るために水素と酸素との化合を必要とするということほど、すでに懷疑の余地のない厳然たる事実である。問題はその方法である。その理想を招来するための政治や文学の在りかた、社会や個人の在りかたが問題なのである。ぼくは両者の完全な一致を夢見るがゆえに、その截然たる区別を主張する。乖離でもなく、相互否定でもない。両者がそれぞれ他の存在と方法とを是認し尊重してのうえで、それぞれの場にいることをねがうのである。それをぼくはただ文学者として、文学の立場からいったにすぎず、また今日のさかんな政治季節を考慮にいれていったのにすぎない。

文学は阿片である——この二十世紀において、それは宗教以上に阿片である。阿片であることに文学はなんで自卑を感じるかがあろうか。現代のぼくたちの文学をかえりみるがいい——阿片ということがたとえ文学の謙遜であるにしても、その阿片たる役割すらはたしえぬもののいかにおきことか。阿片がその中毒患者の苦痛を救いうるように、はたして今日の文学はなにものを救っているのだろうか。所詮は他の代用品によっても救いうる人間をしか救っていないではないか。とすれば、そのような文学は阿片の汚名をのがれたとしても、またより下級な代名詞を与えられるだけのことにすぎない——曰く、碁、将棋、麻雀、ラジオ、新聞、なお少々高級なものになったところで哲学、倫理学、社会学、心理学、精神分析学……。ここでもぼくはそれらに対する文学の優位をいうほど幼稚ではない——ただ持場の相違に注意を求めるだけにすぎぬ。文学は——すくなくともその理想は、ぼくたちのうちの個人に対して、百匹のうちの失われたる一匹に阿片たる役割をはたすことにある。

政治のその目的達成をまえにして——そしてぼくはそれかますます九十九匹のためにその善意を働かさんことを祈つてやまず、ぼくの日常生活においてもその夢をわすれたくないものであるが——それがそうであればあるほど、ぼくたちは見うしなわれたる一匹のゆくえをたずねて歩かねばならぬであらう。いや、その一匹はどこにでもいる——永遠に支配されることしか知らぬ民衆がそれである。さらにもっと身近に——あらゆる人間の心のうちに。そしてみずからがその一匹であり、みずからのうちにその一匹を所有するもののみが、文学者の名にあたひするのである。

かれのみはなにもものにも欺かれぬ——政治にも、社会にも、科学にも、知性にも、進歩にも、善意にも、その意味において、阿片の常用者であり、またその供給者であるかれは、阿片でしか救われぬ一匹の存在にこだわる一介のペシミストでしかない。そのかれのペシミスムがいかなる世の政治といえども最後の「一匹」を見のがすであろうことを見ぬいているのだが、にもかかわらず阿片を提供しようという心において、それによって百匹の救われることを信じる心において、かれはまた底ぬけのオプティミストでもあらう。そのかれのオプティミズムが九十九匹に専念する政治の道を是認するのにはかならない。このかれのペシミスムとオプティミズムとの二律背反は、じつはぼくたち人間のうちにひそむ個人的自我と集団的自我との矛盾をそのまま容認し、相互肯定によって生かそうとするところになりたつのである。唾棄すべき観念論的オプティミズムとは、この矛盾をいずれの側へか論理的に一元化しようとするところを意味する。

ぼくにこのペシミスティック・オプティミズムをはつきり自覚させたものが、ロレンスであった。ぼくはこの文章においてかれの「黙示録論」を紹介するつもりで筆をとったのであるが、そこまでいたらずして終った。が、ぼくはぼく自身の言葉で語りたかつたし、すでにその目的をはたしている。ロレンスについてはまた別の機会に語りたい。

（昭和二十一年十一月二十日）
（思索） 昭和二十二年春季号、二月刊

礼儀れいぎについて

私は生れつき行儀ぎょうぎが悪いせいか、礼儀作法れいぎさほうをよく心得た、いんぎん丁寧な紳士や淑女とつき合うのははなはだ苦手である。そんな人たちと話をしていると、窮屈きゆうくつを通りこして、しまいには憂鬱ゆううつになってくる。先方に少しの悪意あくいもないのが分りながら、こちらがバカにされているような気がしてくる。育ちの悪い人間のひがみにちがいないが、礼儀作法で人念に武装ぶさうをしている人には、相手を近づけない冷たさのあることも否めないであろう。

哲学者のベルクソンは、その種の礼儀作法をニスにたとえて、そのような紳士淑女は、ニスを塗ったばかりのドアのようなもので、われわれに近よることを妨げる、といっているのは適切である。私には全く未知の世界であるが、上流の社交界しゃうかいというのは、ニスを塗ったばかりの紳士淑女が、おたがい相手にさわらないようにして、手を差しのべたり、世にも愛想のよい微笑を浮かべている世界なのである。

しかしわれわれは、あらゆる人に向かって、いつも胸襟を開いて、ざつくばらんにつき合うというわけにはゆかない。初対面の人にもしくは、つき合いの浅い人に向かって、いきなり裸になつてみせたら、かえつて相手を面くらわせることになり、誤解のもとにもなり兼ねない。親しきなかにも礼儀ありといわれるくらいであるから、親しみの薄い人にはなおさら礼儀が必要なのである。

しからば、本当の礼儀とはいかなるものであろうか。ベルクソンは礼儀を二つに分けて考えている。一つは知性もしくは才能にぞくする礼儀である。彼によれば知性の礼儀とは、他人の立場に身を置いて、彼らの仕事に興味をもち、彼らの思想を自分の思想とし、ひと口で言えば彼らの生活を再び生き、自分自身を忘れる能力である。つまり自分の精神を思うがままに、さまざまの形に作りかえうる能力であつて、それが社交的な礼儀と呼ばれうるものである。

完全な社交人はだれに向かつて、その人に興味のあることについて話すことができる。彼は他人の意見に、常にそれを採用することなしに同じる。彼は一切を理解するが、そのために、それをすべて許すということはない。……彼がわれわ

れの氣に入るのは、われわれのところまで下りてきたり、もしくは上がってきたりするその柔軟性にある。とりわけ、彼がわれわれに向かつて話すときに、彼がわれわれをひそかにひいきにしていること、そしてだれに対しても決してそうでないことをわれわれに信じさせるその技術にある。なぜなら、この極めていんぎんな人の特性は、あらゆる友人を平等に、しかもその各人を他の人よりも一層に愛することにあるからである」と彼は書いている。

練達の社交家というのは、おそらくここにベルクソンの指摘しているような人に相違あるまい。つまり、その人と話をしていると、ひそかにこちらの自尊心が満足させられるような人である。自分の思うように相手がなってくれる人である。私たちが巧みな舞踊を見たばあい、まず舞踊家の肉体のしなやかさに感心するが、そのうちにリズムや音楽に慣れて、その次に舞踊家がどのような身体の動かし方をするかが、あらかじめ分ってくる。その結果、私たち自身がその舞踊家を踊らせているような錯覚をもつようになる。それが私たちの自尊心を喜ばせる。ベルクソンは、すぐれた社交家が私たちに与える魅力は、この舞踊家の与える魅力に似ているといっている。この見方はなかなか面白い。

世間でよく、あの人は肌ざわりのいい人だ、ということがいわれる。その人と話していると、こちらの氣持がおのずからやわらぎ、湯かげんのいいフロに入っているような氣持になる。それは相手が巧みにこちらに調子を合わせてくれて、自分と同じ立場で見たり、感じたりしてくれるために、いつのまにか、相手が自分に同じでいてくれることを忘れて、こちらが相手を自分の思うがままに動かしているような氣持になる。そして自尊心が十分に満足させられるのである。こんな風にして相手を喜ばせる技術が、本当の礼儀作法というものであろう。

そしてこの種の礼儀作法は一つの技術であつて、それに熟達すれば、どんな相手でも適当に悦ばせることができる。たとえ相手を心のなかでは輕蔑していても、相手にそれを感じかせず、むしろ相手にこちらを思うがままに動かしているように思わせるのである。人が悪いといえはそれまでであるが、われわれの社交生活では、この技術は相当に大切であつて、人と人とのつき合いを円滑にするためには必要欠くことのできない礼儀作法であるといえよう。

だがベルクソンは、このような知性にぞくする礼儀のほかに、心情にぞくする礼儀を考えている。つまり徳性としての礼儀である。それは相手の心のなかに奥深く降りてゆき、相手が自己の弱点や欠点と考へているものに、愛情をもってや

さしくふれ、それを慰め、力づける礼儀である。

人の心を傷つけないというのは礼儀の根本であるが、私たちはすべて、他人には分らない、最も傷つきやすい、そこに触れられることを最も恐れる弱点を心のなかに持っている。他人から見れば、ほとんど問題にならないようなことでも、本人にとっては生命をおびやかされるように辛いことはいくらでもある。たとえばここに女房に養ってもらって生活している男があるとする。彼は心のなかでは、そのことを何よりもはずかしいことだと思っている。いま、そのような人間に向かつて、君は結構な身分だねと、たとえ冗談にせよいうものがあつたら、その人はほとんど致命的な打撃を心に感じるわけである。よく、いいことと悪いことがある、といわれるが、相手の心のなかの最も傷つきやすい個所を敏感に察して、それには絶対に触れないというのは人につき合う上に何よりも大切な礼儀であろう。

人間というものは自分の欠点については無反省なことが多いが、その反面、自己の欠点について人一倍悩み苦しんでいるのが普通である。また同じく欠点短所であつても、他人に指摘されてもさまで打撃を感じず、その人と一緒になつて自己を嘲笑しうる欠点と、他人に少しでも触れられることを何よりも恐れ厭う欠点と二つある。その見わけが大切であつて、人が絶えず悩みの種にしている弱点を、ことさらにつつき出して苦しめることは心なきわざといわなければならない。

これを要するに、礼儀とは、人のいやがることをいったり、したりしないことである。さらに進んでは、相手の自尊心を満足させ、自分が中心にいるように思わせることである。それに反して人を窮屈にするのは礼儀ではなく、礼儀の形をした冷たいエゴイズムにすぎない。

友達のできない人

私は、この文章を書き始めてから、多くの若い人たちから手紙を貰うようになったが、そのなかでいちばん多いのは、自分にはどういうわけか友達がちつともできない、いったいどうすれば友達ができるのでしょうかという訴えである。私はこれらの手紙を読むたびに、世のなかには孤独な人が意外に多いのを知ってびっくりした。そこで今日はこの問題について考えてみたい。

友達ができない原因についてはいろいろ考えられる。人間には容貌、氣質、性格、才能の相違から、人好きのする人と、しない人の区別のあるのは免れがたく、そして人好きのしない人が一般に友達に恵まれないのは見やすい道理であるが、最初から自分は人に好かれなれないと思ひこむことは、ますます人を遠ざけることにならないだろうか。友達ができないという理由のなかでいちばん大きなものは、この劣等感、もしくはこの臆病さではないかと思われる。

いったい臆病とはどういうことだろうか。アランの『定義集』という本を見ると、次のような説明が出ている。〈それは対象のない恐怖、もしくは心のなかに描いているさまざまな危険をはるかに凌駕する恐怖である。われわれはなにかを演奏する前には攻撃の前の兵士、刑の執行を受ける前の罪人ほとんど同じような恐怖を抱く。臆病心は、この恐怖が、たとえごく小さいものであっても、われわれがそれに氣を取られ出すと、すぐ増大してくることから生じる。またとりわけ、いろいろ理由を考え出してそれに打ち勝とうとすると、ますますそれについて考えることになる。臆病心というものは行為に移る前の筋肉や氣分の不安にほかならぬから、完全にそれから立ち直るには体操による以外はない。休息の態度を取ることも、もしくは、もし可能ならば、実際の仕事に肉体を専念させることが問題である。〉

たしかに人間は理由のない不安や恐怖から臆病になっている。自意識過剰といってもよいが、自分の容貌や性格が他人に快感を与えないと思ひこみ、人の前に出ても、そのことばかり氣を取られていると、それが固いカラになって、自分の持っているさまざまな美点までを被いかくして、ますます自分を人に好かれなれない人間にしてしまう。

自分の美貌を鼻にかけた美人というものはいかに美人であつても、他人に快感を与えないものだが、自分の美しくないことに絶えず劣等感を抱いて卑下している人は、それに劣らず他人を不快にする。男女を問わず、仕事に熱中していると、顔がいちばん美しいといわれるのは、そのような邪念から免れているからである。それに人間というものは、こちらが考えているほど、こちらの容貌に注意を払っていないものである。

自分に友達のできないのは、口が重く、しゃべることが下手で、相手を引きつけたり、悦ばせたりできないからだと思つてゐる人も少なくない。しかしこの種の人も、人間というものは、こちらの言うことなどをそんなに注意してきいてゐるものではないと考えることによって、氣持が楽にならないだろうか。何かすばらしいことを自分が言つたと相手が期待してゐないだろうかと思ふために、ますます口が重くなる。だが、世のなかで、自分の言ふことにいちばん耳を傾けてゐるのは、ほかならぬ自分自身であることを知つておくのはむだではあるまい。何かつまらないことを言つて笑われしまいか、輕蔑されはしまいかと心配するのは、相手が自分の言葉に耳をすませてゐるだらうと思つてゐる一種の自惚である。こちらが不安と心配で胸をドキドキさせてしゃべつてゐるときでも、相手は全然別のことを考えてゐるばあいが多いのである。まさにアランの言う「対象のない恐怖」であつて、そんなことにくよくよするのは全く意味のないことである。

自分を虫けらだと思つてゐる者は人に踏みにじられる、という格言がフランスにあるが、他人から尊重されるには、まず自分で自分を尊重することが第一である。われながらつまらないヤツだと思つてゐる人間に、他人が敬意を払うはずがあるまい。自分は人に好かれたい人間だと思つてゐるが、自分を好いてくれる人はいないだらう。人間というものは、いつも友達を欲しそふにして、卑屈な愛想笑ひをしてゐる人間よりも、孤高の態度をくずさない人間に対して、むしろ友情を求めたがるものである。無益な劣等感を棄てるに越したことはない。

友達のできないことを嘆く人に次に問ひたいことは、あなたは自分の周囲に何か冷たい空氣をいつも流してゐないだらうかということである。私がこれまでくり返し書いてきたように、友情というものは、まずこちらから何かを、しかも何らの報酬を期待することなしに与えることによって成り立つ。与えることが、無際限に与えること自体が悦びであるのが眞の友情というものである。したがつてわれわれはすべての人間と友達になることはできない。われわれの与えうるもの

には限度があるからである。そこに友人の選択が起るのであるが、自分の選んだ人で、その人のためには何を与えても惜しくないという友人をもつことは人生の至福ではないだろうか。

私が冷たい空気というのは、好きな人にはすべてを与えるというこの心意気の乏しいことを意味する。最初から与える気持の全然ない人に友達のできるはずがないが、たとえ与える気持があつても、その代償をひそかに期待するようでは、眞の友情は結ばれない。人間は敏感であるから、報酬を期待して与えられる友情は、これを無意識のうちに見破つて、警戒する。友達のできないことを嘆く人は、この種の、他人をして警戒せしめるものが自分にないかどうかを十分に反省して、みる必要がある。それと同時に注意すべきことは、他人から報酬を期待しない友情を与えられながら、それを素直に、心から悦んで受け入れることをしないで、これには何らかの目的があるのではないかと警戒することであろう。この種の警戒心もまた冷たい空気となつて諸君をつつみ、友達をよせつけない。一般に、友達のないことを嘆く人には、この冷たい警戒心で無意識のうちに武装している人が多いように思われる。

私が何かを与えるというのは、もちろん物質的なものばかりを意味するのではない。生れつきさまたまの魅力を具えている人は、与えるものを多くもつ人である。問題は与えるものの乏しい人にある。自分は何を無償で与えることができるかを考えるとき、よき友達はおのずから作られるにちがいない。

イヤなやつ

人とつき合う法についておしやべりをするに当って、「イヤなやつ」を欠かすことができないのはいうまでもない。「イヤなやつ」という言葉は、決してひとをほめた言葉ではない。われわれが、なるべく人づき合いをよくしようと努力するのは、他人から「イヤなやつ」といわれたくないからである。しかし、世のなかで、多少とも頭角を現わしている人間で、「イヤなやつ」と批評されなかった人がかつてあつたらうか。

文壇とか芸能界は昔からひとの口のうるさいところであるが、森鷗外が死んだとき、雑誌『新潮』の主幹中村武羅夫は、次のような記事をかかげた。《生前イヤな奴だと思つて居ても死後その人の逸話や私生活を知ると何となく好きになつて来る人がある。ちよつとした逸話にその人の人間らしい面目が見えて、生前の反感が打消されて了うような人がある。原敬だの山県有朋だの出羽の海だのは、生前イヤであつたが、死んでから割合に好感を持てた。ところが生前もイヤな奴で死後も尚イヤな奴がある。大隈だの森鷗外だのがそれだ。彼等の死後業々しく報道される彼等の人となりを知れば知るほど、一層親しみが持てない》云々。これに対して、永井荷風がきびしく抗議したことは、文壇史の有名な一ページとなつてゐる。

鷗外と並び称された夏目漱石についても、名作『黒髪』の作者近松秋江が、『僕は暗に世をすねとるようなあのボースがどうも気に入わんです。あすこにどうも嘘があると思うですよ。西園寺公の清談会へ出席しなかつたりね。博士をことわつたりね。どうもありや眉唾ものだな』といつて散々にこきおろす話が、長田幹彦著『文豪の素顔』のなかに出てくる。そういう近松秋江が、彼の家で一週間ばかり女中をした林芙美子に、イヤな人として『放浪記』のなかに書かれているのは面白い。文学者というものは人一倍感情的で、嫉妬心が強く、好ききらいが烈しいから、普通の社会では立派な紳士として通っている人に対しても、イヤなやつとか、虫が好かないとかいつて、悪口を言うのであろう。しかし鷗外や漱石の文学が、いかなる人物評にもびくともしないので、高くそびえていることは、あらためていうまでもあるまい。

「喬木に風が強い」といわれるように、人間は名声を得てくれば、得てくるほど、世間の風あたりの強いことは、あらゆる社会において共通のことである。「イヤなやつ」といわれることを気にしては、生きてゆくことも、自分の志をとげることできない。フランスの大政治家ブリヤンは、世評というものを全く気にかけず、彼を攻撃した新聞などは少しも読まないで、いつも《自分にとって大切なことは、他人が自分のことをどう考えているかということではなく、自分が奴らのことをどう考えているかということだ》と豪語していたという。社会と接触の多い仕事をしている人は、多かれ少なかれブリヤンのような度胸をもっていなければ、世のなかをしのいでゆくことはできない。

私が「イヤなやつ」について論じようとするのも、ひたすらに「イヤなやつ」といわれない方法について考えようというのではない。われわれは、いくら、人から好かれようと努力しても、すべての人から好かれるわけには決してゆかない。それは、われわれがあらゆる人を、分けへだてなく愛しようとしても、絶対にそうはゆかないのと同じである。そんなことは仏陀やキリストでなければできない。われわれは人間であるかぎり、特別に好きな人や、どうしても好きになれない人ができてくるのは当然である。大切なことは、自分の好きな人が、すぐれた人、立派な人であることであろう。

いや、しかし、これもまた、いちがいにそうとは言いい切れないところがある。いくらすぐれた人、立派な人でも、好きになれない人、親しみのもてない人がいるものだ。私個人についていえば、同じく偉い人であっても、漱石には私淑する気持はあるが、鷗外には親しみを感じることが少ない。

くり返していえば、われわれはすべての人を愛することも、すべての人から愛されることもできない。しかし社会生活においては、自分の氣に入った人間だけとつき合うこともできないければ、自分を好まない、自分を「イヤなやつ」と考えている人間に、つき合ってもらわなければならない。いやむしろ、そういうばあいのほうが多いであろう。人とつき合う法について工夫をしなければならぬのはまさにそのようなばあいである。お互に親愛の情を感じ合える人間同士のあいだには、交際術の必要はないのである。

そこで、再び、ふり出しに戻るのであるが、他人から「イヤなやつ」と思われまいようにするには、どうしたらいいのであろうか。それよりも「イヤなやつ」とは、一般的にいつて、どのような人間を指すのであろうか。それにはまず諸君

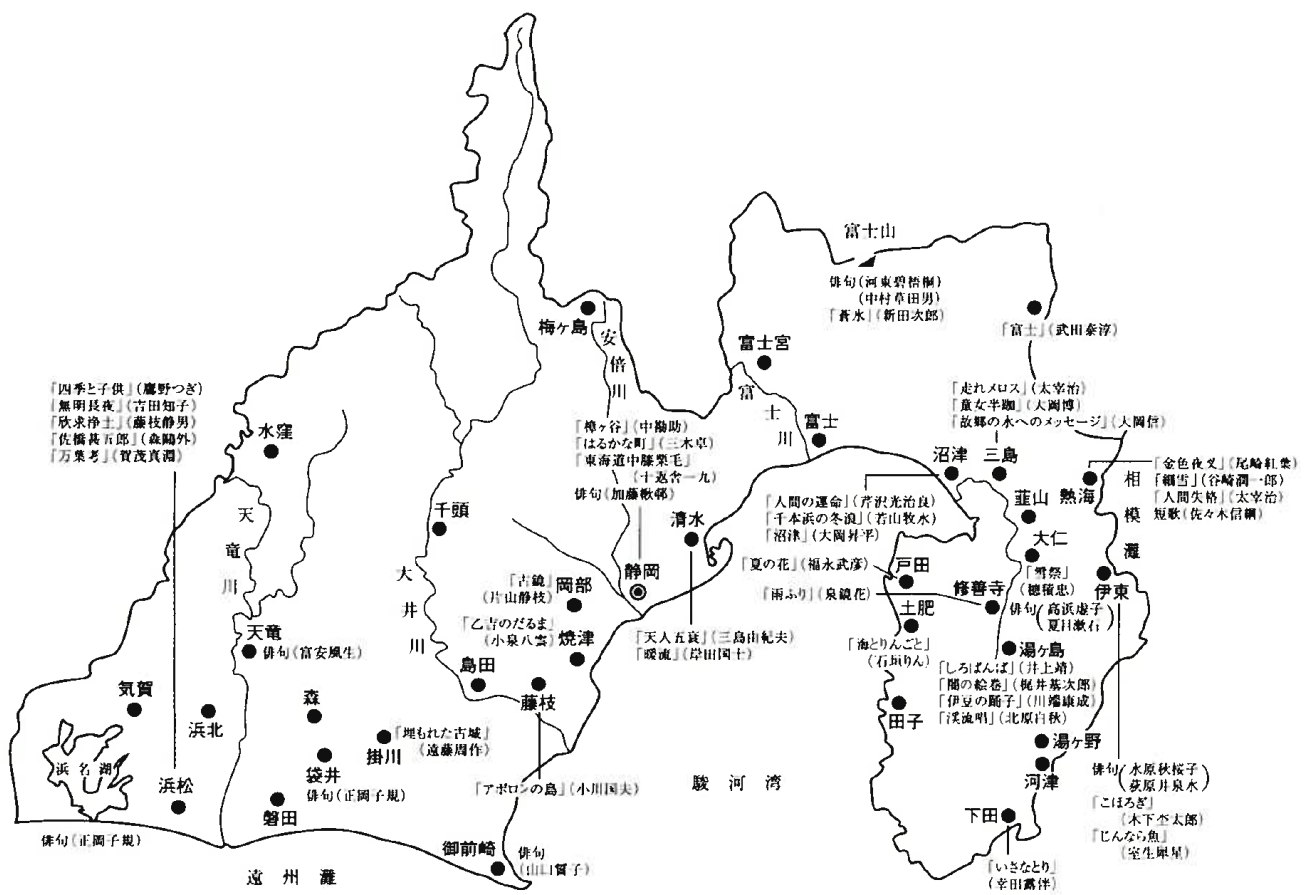
の周囲を見まわすだけで十分である。もしくは諸君自身のことを考えてみるのが近道であるかもしれない。自分は人に好かれていであらうか、それともいやがられているであらうか、と自問自答するのである。

私自身のことを考えてみると、私はまず人に快感を与える容貌の持主ではない。性質についていえば、他人の幸福よりも不幸を喜ぶ根性の悪さがある。自分ではできるだけ怠けて、人を働かせ、その功を自分だけでひとり占めしたいというズルさと、欲の深さがある。権力者にはなるべく逆らわないで、時としては進んでその権力に媚びようとするいやらしさがある。絶えず世のなかの動きを眺めていて、できるだけバスに乗りおくれまいとする、こすつからいところがある。他人にはきびしくて、自分には寛大な、エゴイストの部分が非常に多い。ケチで、勘定高く、他人の不幸には知らぬ顔をし、自分の不幸は十倍ぐらい誇張して、いつも不平不満でいる。考えてみると、「イヤなやつ」の条件をことごとく具えている。

そして、こんなことを、あけすけに書いた方が、かえって得になるとひそかに計算しているのであるから、われながら憂鬱である。そうして私のような人間に限って、人に好ききらいが多く、自分に圧迫感を与えるような人間を見ると、すぐに「イヤなやつ」呼ばわりするのである。

しかし居直って言わせてもらえば、たいていの人間はみなそれぞれイヤな部分を具えているのではないか。人間的などいうのは、イヤなやつだというのと同義義語であるかもしれないのだ。そして、このイヤな部分によつて、お互に反発すると同時に、お互に愛し合うばあいも少なくないのである。人間の長所美点は、ふしぎにその短所欠点と結びついている。どこから見ても、非の打ちどころがない人間などというものは、私などから見ると、ほとんど魅力がない。そういう人間は、ある意味からすると、「イヤなやつ」ともいえるのである。こちらのひがみであるかもしれない。それはともかく、人につき合う法は、この自他のうちにある「イヤなやつ」の処理から始めなくてはならない。

静岡県文学略地図 (近代文学)



伊豆文学フェスティバル

実行委員会事務局

〒420 静岡県静岡市追手町9番6号
静岡県教育委員会文化課文化企画室内
TEL(054)221-3109 FAX(054)250-2784

The Secretariat for the Executive Committee of The Izu Literature Festival

The Culture Planning Section
The Culture Department of Shizuoka Prefectural Board of Education
9-6 Ohte-machi, Shizuoka-shi, Shizuoka-ken 420, Japan
Tel: 81-54-221-3109; Fax : 81-54-250-2784